

—茨城県土浦市—

下高津小学校遺跡

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2013

有限会社 常陽エステート
土浦市教育委員会
有限会社 毛野考古学研究所

—茨城県土浦市—

しも たか づ しょう がっ こう
下高津小学校遺跡

——宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

2013

有限会社 常陽エステート
土浦市教育委員会
有限会社 毛野考古学研究所

序

土浦市は、西に筑波山を仰ぎ、東に霞ヶ浦を擁す自然環境に恵まれた都市です。この恵まれた自然環境の中で、太古の昔から現在に至るまでさまざまな人々の暮らしが営まれてきました。市内に残る埋蔵文化財は、往時の生活や文化を現在の私達に伝えてくれる貴重な遺産と言えます。そうした文化遺産を調査および研究をするとともに、保護活用していくことは、現在の私たちにとって重要なことであります。

このたび、市内下高津四丁目に所在する下高津小学校遺跡において開発行為に伴う発掘調査が行われました。本書は、その調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもちろんのこと、土浦市の歴史に対する理解を深めるための資料として充分に活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、有限会社常陽エステートから多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成 25 年 6 月

土浦市教育委員会
教育長 井坂 隆

例　　言

- 1 本書は、宅地造成に伴う茨城県土浦市下高津四丁目 737-1 ほかに所在する、下高津小学校遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、開発事業者の有限会社常陽エステートと土浦市教育委員会および有限会社毛野考古学研究所が三者協定を結び、土浦市教育委員会の指導のもと、有限会社毛野考古学研究所が行った。
- 3 発掘調査の面積、期間、調査体制は、以下のとおりである。

調査面積 800m²

調査期間 平成25年2月25日～平成25年3月25日

調査指導 石川功・比毛君男（土浦市教育委員会）

調査担当 早川麗司（有限会社毛野考古学研究所）

調査補助員 市村浩男 遠藤幸子 大沼義則 加藤通紀 高畠仁子 寺崎清次 針ヶ谷紀夫 平林敬子

掘館孝行 宮本富夫 山崎一義 渡辺由美子

- 4 整理期間と整理技士は、以下のとおりである。

整理期間 平成25年4月1日～平成25年6月28日

整理技士 鬼山由子 仙波菜津美 高橋真弓 根本正子（五十音順）

- 5 本書の執筆分担および編集は、以下のとおりである。

第1章第1節を比毛、第1章第2節から第3章と編集を早川が担当した。

- 6 航空写真撮影は、J・T空撮に委託した。

- 7 第1・2号住居跡出土の須恵器と土鍤については、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社の文化課文財調査事務所の佐々木義則氏に御指導をいただいた。

- 8 発掘調査から報告書刊行に至るまで、次の方々および諸機関から御助言・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略　五十音順）

稲田健一 大久保隆史 清水哲 沼田慎之 原信田正夫 増子勝男

アクアワールド茨城県大洗水族館 茨城県教育庁文化課

公益財団法人茨城県教育財団埋蔵文化財整理センター国分館 ひたちなか市埋蔵文化財センター

古川登記測量事務所 ミュージアムパーク茨城県自然博物館 有限会社カワヒロ産業

有限会社常陽エステート

- 9 本書に関わる出土品および記録図面と写真是、上高津貝塚ふるさと歴史の広場で保管している。

凡　　例

- 1 当遺跡の地区設定は、世界測地系に準拠し、X = + 8320 m、Y = + 31340 mの交点を基準点(A 1al)とした。調査区は、この基準点をもとに遺跡範囲内を東西・南北各々を 40 m四方の大調査区に分割し、さらにこの大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。
大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3とし、「A 1区」「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a、b、c…j、西から東へ 1、2、3…o と小文字を付け、大調査区の名称と組み合せて、例えば「A 1al 区」のように呼称した。
- 2 実測図・一覧表で使用した記号は次のとおりである。

遺構	S I - 坂穴住居跡	S K - 土坑	S D - 溝跡	Pit - ピット	P - 坂穴住居跡の柱穴
土層	K - 扰乱				
- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。
 - (1) 遺構全体図は 400 分の 1、調査区設定図は 500 分の 1、各遺構の実測図については、30 分の 1 および 60 分の 1 の縮尺で掲載してスケールで表示した。そのほか、種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
 - (2) 遺物実測図は、2 分の 1、3 分の 1、4 分の 1 の縮尺で掲載してスケールで表示した。
 - (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

■■■■■	焼土・火床面	■■■■■	竈範囲	繊維土器	■■■■■	竈構築材	黒色処理
■■■■■	須恵器	-----	硬化面				
- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖 29版』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社 2007年)を使用した。
- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。
 - (1) 計測値の()内の数値は現存値を、[]内の数値は推定値を付して示した。
 - (2) 遺物番号は各遺構ごとの通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。
 - (3) 遺物観察表の備考欄は、必要と思われる事項を記した。遺物観察表の胎土については、含有量が特に多い鉱物には「多」、少ないものは「少」および「微」と記した。
- 6 坂穴住居跡の「主軸」は原則窓を通る軸線とし、主軸方向はその他の遺構の長軸(径)方向とともに、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N - 10° - E)

目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	6
第1節 調査の概要	6
第2節 基本層序	6
第3節 遺構と遺物	7
1 古墳時代の遺構と遺物	7
豊穴住居跡	7
2 奈良・平安時代の遺構と遺物	12
豊穴住居跡	12
3 その他の遺構と遺物	21
(1) 豊穴住居跡	21
(2) 土坑	23
(3) 溝跡	24
(4) 遺構外出土遺物	25
第4節 まとめ	28
写真図版	
抄録	
奥付	

第1章 調査経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成23（2011）年10月4日、当事業者である有限会社常陽エステートから土浦市教育委員会教育長に、下高津四丁目地内で宅地造成事業を計画しており、事業地内の埋蔵文化財の有無について照会があった。同年12月7日に事業者と現地確認を行った際に土浦市教育委員会は、予定地が下高津小学校遺跡の一部に該当し、現況が山林であるため樹木の伐採後に埋蔵文化財試掘調査が必要である旨を回答した。

これを受けた事業者の樹木伐採後、平成24（2012）年1月17～19日に土浦市教育委員会は試掘確認調査を行った。調査の結果、豊穴住居跡5軒、土坑2基、溝2条を発見した。

この調査結果をもとに、事業者と土浦市教育委員会は保存に向けた協議を継続した。協議の結果、地形と工事内容から全面的に切り盛り土が発生し遺跡の現状保存は困難であること、埋蔵文化財の対象箇所に対しては記録保存のための発掘調査を行うことで合意した。平成25（2013）年1月29日、土浦市教育委員会教育長と事業者、発掘調査主体である有限会社毛野考古学研究所との間で当事業の埋蔵文化財取扱と調査に関する協定書を締結した。

文化財保護法上の手続は、法第94条に基づく埋蔵文化財の発掘の届出が平成24（2012）年2月20日付けで事業者より土浦市教育委員会に提出され、同年3月23日付けで茨城県教育委員会教育長宛に進達した。同年3月30日付けで茨城県教育委員会教育長より、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知を受けた。

文化財保護法第92条に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出は、平成25(2013)年1月29日付けで茨城県教育委員会教育長宛に進達した。同年2月20日付けで茨城県教育委員会教育長より埋蔵文化財発掘調査の通知を受けた。

発掘調査の終了確認依頼は、平成25（2013）年3月29日付けで進達を行い、同年4月2日付けで茨城県教育委員会教育長より終了確認の通知を受けた。

第2節 調査経過

2月25日 発掘調査を開始し、重機による表土除去作業を行う。

2月28日 発掘調査補助員を投入し、遺構確認作業を開始する。3月1日に表土除去作業は終了する。

3月4～9日 4日に遺構確認作業が終了し、遺構調査を開始する。第1～5号住居跡、第1～6号土坑、第1～16号ピットの調査を行う。

3月11～15日 第7号住居跡、第7号土坑、第1・2号溝跡、第17～19号ピットの調査を行う。

3月23日 空撮を行う。

3月25日 発掘調査を終了する。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

下高津小学校遺跡は、茨城県土浦市下高津四丁目 737-1 ほかに所在する。

遺跡が所在する土浦市は、茨城県南部にある篠ヶ浦の土浦入り西方に位置している。市域の地形は、市中央部を流れる桜川の流域に広がる標高約 1~4 m の沖積低地と、その北側の新治台地および南側の筑波・稻敷台地に区分される。台地は上位台地と中位段丘の、それぞれ形成時期が異なる二つの地形に分けられる¹⁾。

当遺跡は、桜川と花室川に挟まれ南北両側から谷が樹枝状に入り込む台地のうち、桜川の沖積低地を北に臨む中位段丘に位置している。遺跡は桜川流域に属し、桜川河口部から上流約 6 km に位置している。標高は、調査区で約 23 m である。調査前の現況は原野である。

第2節 歴史的環境

土浦市では、旧石器時代から近世までの遺跡 628か所が周知されている²⁾。遺跡は霞ヶ浦沿岸や桜川、花室川、境川、天の川などの各河川沿いの台地上に数多く分布している。ここでは、当遺跡周辺に分布している遺跡の中で、発掘調査が行われている遺跡を中心に概要を記述する。

桜川流域では、当遺跡と谷を挟み南側には龍善寺遺跡<30>がある。縄文時代中期の阿玉台式期から加曾利 E 3 式期までの竪穴住居跡 25 軒と土坑 302 基、古墳時代の竪穴住居跡 21 軒が調査されている。古墳時代の集落は、前期から後期半まで断続的に営まれ、古墳時代前期の 33 号住居跡からは銅鏡が出土している³⁾。

当遺跡と谷を挟み西側には、寄居遺跡<33>とうぐいす平遺跡<34>がある。寄居遺跡では、縄文時代前期の竪穴住居跡 1 軒、古墳時代から平安時代までの竪穴住居跡 63 軒、中世の方形竪穴造構、溝跡、地下坑などが調査されている。古墳時代から平安時代の集落は、古墳時代前期から 7 世紀まで断続的に営まれ、8 世紀には続かない。集落は 8 世紀後半になって再び営まれ、9 世紀まで継続する。うぐいす平遺跡では、弥生時代後期後半の第 36 号住居跡から銅鏡が出土している。古墳時代前期に営まれた集落は、その後に継続せず途絶え、8 世紀になって再び集落が形成される。集落は、8 世紀後半から 9 世紀中葉にかけて規模が縮小し、9 世紀後葉になって規模が拡大、その後は 11 世紀前半まで継続する⁴⁾。

宍塙の大池の近くには、宍塙古墳群<51>がある⁵⁾。調査が行われたのは、第 1 号墳、第 5 号墳、第 6 号墳である⁶⁾。第 1 号墳は、通称「大日山」と呼ばれる全長約 56 m の前方後円墳である。遺物は、金剛製耳環と人骨や歯が出土している。第 5 号墳は直径約 23 m の円墳、第 6 号墳は全長 23 m の前方後円墳で、周溝から円筒埴輪および馬や人物の形象埴輪が出土している。宍塙古墳群は、『茨城県遺跡地図』に前方後円墳 3 基、円墳 20 基、不明 1 基、つくば市側に 1 基が登録されている⁷⁾。宍塙古墳群は、この地域の最有力な集団によって営まれた古墳群と考えられる。そのほか、古墳は高津天神山古墳群<3>、桜ヶ丘古墳<10>、天王山古墳群<31>がある。高津天神山古墳群のなかの 1 基で、円墳である高津天神山古墳からは円筒埴輪が出土している⁸⁾。池の台遺跡<5>では、6 世紀前半から後半までの竪穴住居跡が 32 軒が調査されている⁹⁾。小松貝塚<6>は縄文時代後晩期の貝塚で、骨角器、貝製品、玉類、製塩土器、土偶が出土している。そのほか、幅 9 m の第 2 号溝跡が確認されており、古墳時代以降の道路跡と考えられている¹⁰⁾。房谷遺跡<8>では、古墳時

代後期の堅穴住居跡 1 軒、内出後遺跡 <11> では、縄文時代の屋外炉、時期不明の堅穴住居跡 1 軒、近世の墓坑が調査されている¹³⁾。

花室川流域では、中居遺跡 <13>、神出遺跡 <14>、東出遺跡が調査されている¹⁴⁾。中居遺跡では、平安時代の堅穴住居跡 1 軒、神出遺跡では、古墳時代の堅穴住居跡 20 軒と平安時代の堅穴住居跡 22 軒、そのほか、中世の館に関連する掘立柱建物跡と溝跡、墓に関連する地下式坑と火葬墓が確認されている。古墳時代の堅穴住居跡は前期が 1 軒で、それ以外は 5 世紀後半から 6 世紀前半のものである。平安時代の堅穴住居跡は、9 世紀後半から 10 世紀代の住居跡が中心である。東出遺跡では堅穴住居跡 3 軒が調査されており、古墳時代後期、奈良時代、平安時代の各時代 1 軒ずつ確認されている。霞ヶ岡遺跡 <9> では、15 ~ 16 世紀の土坑 2 基、溝跡 1 条、中世以降の道路跡 1 条¹⁵⁾、宮脇 B 遺跡 <40> では、最大幅が 35 m で、深さは 1 m 以上ある 5 ~ 16 世紀の溝跡¹⁶⁾が、それぞれ調査されている。

いさろ遺跡 <17> では、古墳時代中期の堅穴住居跡が 1 軒確認されている¹⁷⁾。阿ら地遺跡 <19> では、堅穴住居跡 18 軒が調査されており、古墳時代中期前半が 1 軒、5 世紀中葉が 3 軒、6 世紀中葉が 4 軒、6 世紀後葉が 5 軒、6 世紀末葉から 7 世紀初頭が 3 軒、7 世紀中葉が 1 軒確認されている。8 世紀代の須恵器が採集されているため、その時期まで集落が継続する可能性がある¹⁸⁾。六十原 A 遺跡 <22> では、縄文時代中期の加曾利 E 式期を主体とした堅穴住居跡 11 軒、土坑 88 基が調査されている¹⁹⁾。六十原 A 遺跡 <23> では、縄文時代中期の堅穴住居跡 8 軒、土坑 109 基が調査されている²⁰⁾。水国遺跡 <26> では、第 2 次調査で 6 世紀後半の堅穴住居跡が 1 軒調査され、これと同時期の堅穴住居跡は、第 1 次調査の B 区で 9 軒確認されている²¹⁾。第 3 次調査では、旧石器時代の石器集中地点 1 か所、堅穴住居跡は、縄文時代早期前半の燃糸文式期の 1 軒、弥生時代後期後半 1 軒、古墳時代では前期 4 軒、中期 3 軒、後期 2 軒が確認されている²²⁾。十三塚 A 遺跡 <39> では、中世以降の塚が 1 基調査されている²³⁾。

* 文中の <> 内の番号は、第 1 図および表 1 中の該当遺跡番号と同じである。

註

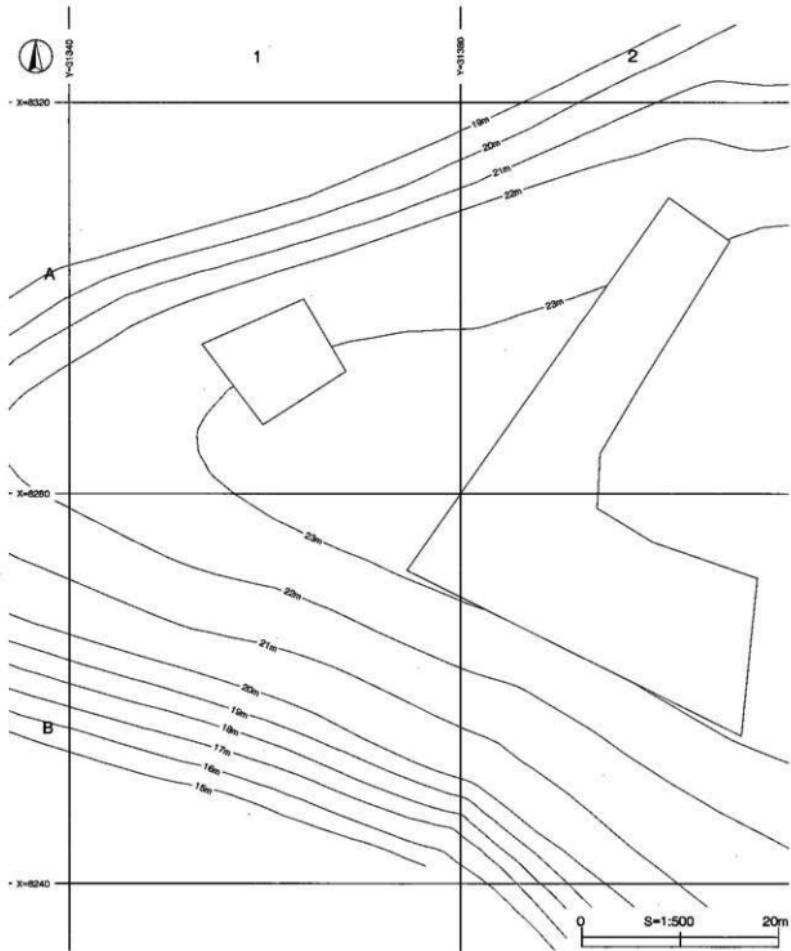
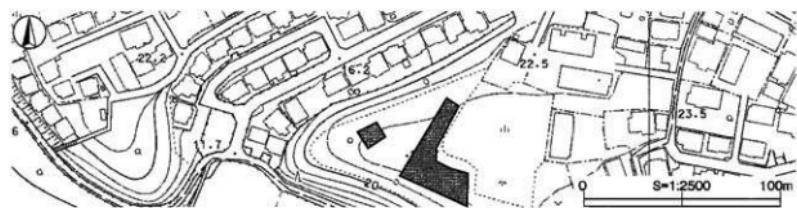
- 1) 雨谷昭「土浦の台地 1 土浦の台地と低地」『図説 土浦の歴史』 土浦市教育委員会 1991 年 3 月
- 2) 土浦市教育委員会『土浦市遺跡地図』 土浦市教育委員会 2011 年 3 月
- 3) 小川和博 大庭淳志 齢田恵一 開口清『龍宿寺遺跡』 土浦市教育委員会 2006 年 7 月
- 4) 土生朗治「寄居遺跡 うぐいす平遺跡」『茨城県教育財團文化財調査報告』第 84 号 財團法人茨城県教育財團 1994 年 3 月
- 5) 芥根修嗣 茂木雅博「常陸春塚」 国際大学実業調査団 1971 年 3 月
- 6) 「土浦市史」では、第 1 号墳は共通しているが、第 5 号墳を第 3 号墳、第 6 号墳を第 4 号墳と記述している。土浦市編さん委員会「土浦市史」 土浦市役所 1975 年 11 月
- 7) 茨城県教育文化課「茨城県遺跡地図」 茨城県教育委員会 2001 年 3 月
- 8) 土浦市編さん委員会「土浦市史」 土浦市役所 1975 年 11 月
- 9) 池安衛「池の台遺跡発掘調査報告書」 土浦市教育委員会 池の台遺跡発掘調査会 1981 年 1 月
- 10) 福田礼子 川島尚宗 佐藤孝雄 吉永亜紀子 阿部きよ子 藤田純明 室月明彦 開口清 黒澤春彦「小松貝塚」 土浦市教育委員会 2012 年 3 月
- 11) 石川功 中澤道也 齢田恵一「浅間塚西遺跡・房谷遺跡・内出後遺跡(第 1 次調査)」 土浦市教育委員会 2011 年 3 月
- 12) 桐谷優 高野浩之 土生朗治 長谷川秀久「東出遺跡・神出遺跡・中居遺跡」 土浦市遺跡調査会 1999 年 10 月
- 13) 14) 上高津貝塚ふるさと歴史の広場「上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報」第 3 号 上高津貝塚ふるさと歴史の広場 1998 年 3 月
- 15) 比毛君男「いさろ遺跡」 土浦市教育委員会 2001 年 3 月
- 16) 黒澤春彦 高野麻希 齢田恵一「阿ら地遺跡」 土浦市教育委員会 2002 年 12 月
- 17) 小川和博 大庭淳志 開口清「六十原遺跡」 土浦市教育委員会 土浦市遺跡調査会 2003 年 11 月
- 18) 肥田順一「六十原 A 遺跡」 土浦市教育委員会 土浦市遺跡調査会 1996 年 6 月
- 19) 齢田恵一「水国遺跡(第 2 次)」 土浦市教育委員会 2002 年 9 月
- 20) 齢田恵一「水国遺跡(第 3 次)」 土浦市教育委員会 2003 年 1 月
- 21) 小崎峰延彦「寺家／後 A 遺跡 寺家／後 B 遺跡 十三塚 A 遺跡 十三塚 B 遺跡 水国十三塚遺跡 旧鎌倉街道」『茨城県教育財團文化財調査報告』第 60 号 財團法人茨城県教育財團 1990 年 3 月



第1図 下高津小学校遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1「土浦」 星印が調査区の位置）

表1 下高津小学校遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代				
		旧	新	弥	古	中			旧	新	弥	古	中
1	田代遺跡	●	●	●	●	●	18	才ノ内遺跡	●	●	●	●	●
2	弁天社東遺跡	●	●				19	阿ら丸遺跡	●	●	●	●	●
3	高津天神山古墳群	●	●				20	油井田遺跡	●	●	●	●	●
4	大久保遺跡	●	●				21	極ヶ丘遺跡	●	●	●	●	●
5	池の台遺跡	●	●	●	●	●	22	六十石山遺跡	●	●	●	●	●
6	小松貝塚	●	●				23	六十石A遺跡	●	●	●	●	●
7	小松遺跡	●	●				24	部分遺跡	●	●	●	●	●
8	深谷遺跡	●	●				25	ピヤ君遺跡	●	●	●	●	●
9	郡ノ岡遺跡	●	●	●	●	●	26	木原遺跡	●	●	●	●	●
10	駒ヶ丘古墳	●	●	●	●	●	27	水園神代遺跡	●	●	●	●	●
11	内出井遺跡	●	●	●	●	●	28	わ台遺跡	●	●	●	●	●
12	蓮下遺跡	●	●	●	●	●	29	中高津西遺跡	●	●	●	●	●
13	中高津遺跡	●	●	●	●	●	30	無名寺遺跡	●	●	●	●	●
14	神出遺跡	●	●	●	●	●	31	火王山古墳群	●	●	●	●	●
15	南古伊勢遺跡	●	●	●	●	●	32	高井城址	●	●	●	●	●
16	伊勢遺跡	●	●	●	●	●	33	吾妻遺跡	●	●	●	●	●
17	いさら遺跡	●	●	●	●	●	34	うぐいす平原跡	●	●	●	●	●
									48	根木遺跡	●	●	●
									49	五斗身遺跡	●	●	●
									50	帶沼久保遺跡	●	●	●
									51	穴澤古墳群	●	●	●



第2図 調査区位置図（上）・調査区設定図（下）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

調査の目的は、宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査である。開発対象地に土浦市教育委員会が事前に試掘調査を行い、その成果をもとに調査面積 800m²が設定された。

調査区については、40 m四方の大調査区を設定し、さらにこの大調査区を東西・南北に各々 10 等分に分割し、4 m四方の小調査区を設定した。調査は表土除去作業から始め、同時に遺構確認作業を行った。遺構調査は遺構剥削作業から始め、遺構測量および写真撮影を適宜行った。

調査の結果、堅穴住居跡 7軒（古墳時代 3軒、奈良時代 1軒、平安時代 1軒、時期不明 2軒）、土坑 7基（時期不明）、溝跡 2条（時期不明）、ピット 19基（時期不明）を確認した。遺物は、遺物収納コンテナに 8箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（壺・鉢・甕）、須恵器（壺・高台付壺・蓋・甕・瓶・円面鏡）、土製品（球状土錐・管状土錐・支脚）、鉄製品（刀子・紡錘車）である。

第2節 基本層序

調査区に 3か所のテストピットを設定し、基本土層の観察を行った。調査区北部のテストピット 3について、調査区域にある擾乱の深さを確認するため設定した。擾乱は遺構確認面から深さ 1 m以上あり、調査区域の擾乱の中については、遺構はすでに壊されているものと判断した。

テストピット 1

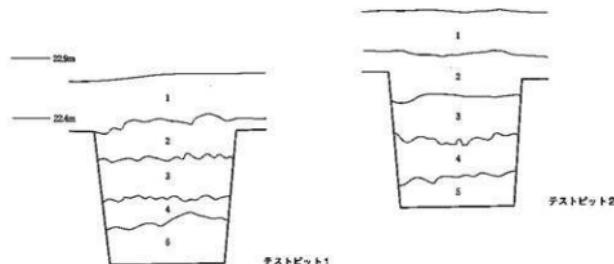
第1層は、擾乱で発生した土が盛られて出来た土層である。灰白色（10YR8/1）粘土ブロックを非常に多く含むことから、擾乱は粘土層まで達しているものと考えられる。この層はすべての調査区壁で確認でき、第1・2・4号住居跡では、この盛土層の直下に厚さ 11～35cm の旧地表面が残っている。

第2層は黄橙色（10YR7/8）ハードローム層、第3層は明黄褐色（10YR6/8）ソフトローム層、第4層は明黄褐色（10YR6/8）、第5層は明黄褐色（10YR6/6）のいずれもハードローム層である。

テストピット 2

第1・2層は、いずれも擾乱で発生した土が盛られて出来た土層である。第3層は黄橙色（10YR7/8）ハードローム層、第4層は明黄褐色（10YR6/8）ソフトローム層、第5層は明黄褐色（10YR6/8）ハードローム層である。

遺構は、盛土層を除去したハードローム層上面で確認している。



第3図 基本土層図 (S = 1:40)

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡3軒を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

竪穴住居跡

第3号住居跡（第4・5図 PL2・6・7）

位置 B2e8区に位置している。

重複関係 第1号住居跡、第1・2・6号土坑、第2号ピットより古い。

規模と形状 東側が調査区域外に延びているため、北西・南東軸は4.10m、北東・南西軸は4.50mしか確認できない。平面形と主軸方向は不明である。壁高は最大15cmで、直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、硬化面は確認できない。壁溝は北西壁下と南西壁下で確認した。

ピット 1か所。第1号土坑の底面で確認した。長径35cm、短径32cm、深さは48cmである。位置と規模から主柱穴と考えられる。覆土は暗褐色土を基調としている。

ピット土層解説

1 暗褐色(10YR3/3) ローム粒子多量

2 暗褐色(10YR3/4) ローム粒子多量

覆土 3層に分層できる。ロームブロックをわずかにしか含まない暗褐色土を基調としている。第3層は褐灰色粘土層で、遺構築材が廃棄されたものと考えられ、この部分にだけ認められる。

土層解説

1 暗褐色(10YR3/3) ロームブロック・ローム粒子微量

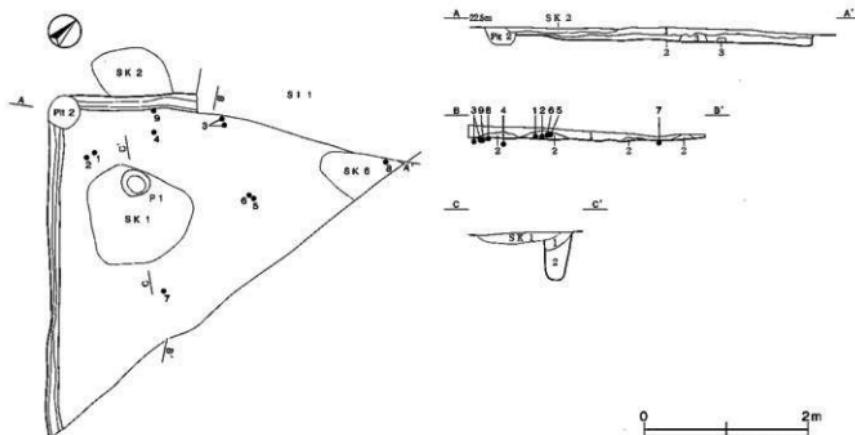
3 褐灰色(10YR5/1) 粘土層 焙土ブロック多量、炭化

2 暗褐色(10YR3/3) ローム粒子多量

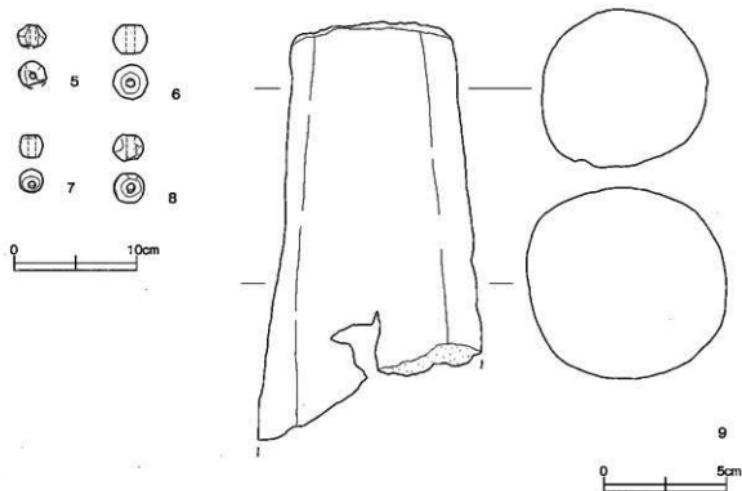
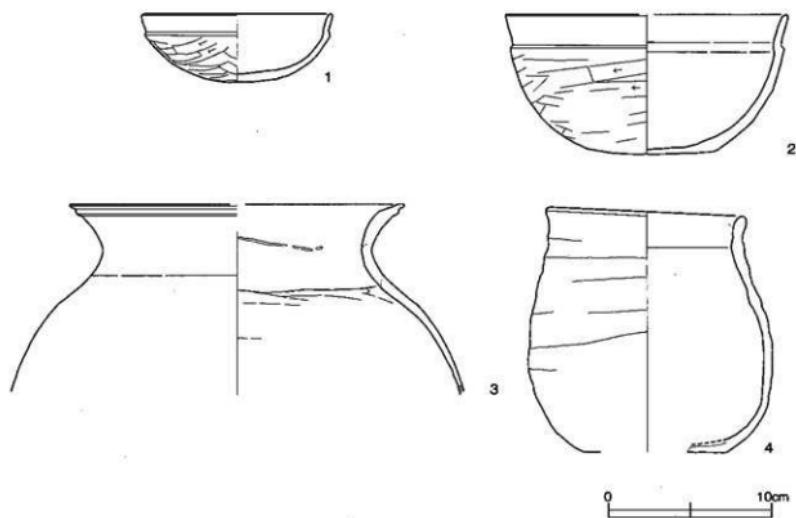
粒子微量

遺物出土状況 遺物は覆土中に中心に出土しており、床面から出土したものは少ない。土器の大部分は細片もしくは小片であり、完形品は無い。1は床面と覆土中から別々に出土した破片が接合し、ほぼ完形に復元できる。3・4・7～9は床面、2・5・6は覆土中から出土している

所見 遺物群の時期は、7世紀前半と考えられる。



第4図 第3号住居跡実測図



第5図 第3号住居跡出土遺物実測図

表2 第3号住居跡出土遺物観察表（第5図）

1	土器器	坏	11.8	42	-	白色粒子・赤色粒子・透明粒子	にぶい橙(7.5YR6/4)	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外 面ヘラ削り 内面ナデ	床面・覆土中	
2	土器器	鉢	[17.4]	8.6	7.3	白色粒子(多)・赤色粒子・透明粒子(少)・白雲母(少)	にぶい黄橙(10YR7/4)	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外 面ヘラ削り 内面ナデ	覆土中	二次焼成 痕無し
3	土器器	甕	[20.6]	(11.7)	-	白色粒子(多)・透明粒子(多)・白雲母(多)	橙(7.5YR7/6)	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外 面ナデ 内面ヘラナデ・ナデ	床面	
4	土器器	甕	11.8	15.1	8.9	白色粒子(多)・透明粒子(多)・白雲母(微)	橙(7.5YR6/6)	普通	外・内面ナデ 外面に輪積み痕が明瞭、内面は 平滑	床面	二次焼成 痕有り 外面藻 付着

5	球状 土錐	1.8	2.3	(5.5)	0.6	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(微)	にぶい黄橙(10YR7/4)	不良	欠損 ナデ	覆土中	
6	球状 土錐	2.4	2.9	17.9	0.8	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(微)	にぶい黄橙(10YR6/4)	普通	完形 ナデ	覆土中	
7	球状 土錐	1.9	1.4	6.1	0.6	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子・白雲母(微)	にぶい橙(7.5YR6/4)	普通	完形 ナデ	床面	
8	球状 土錐	2.2	2.5	12.0	0.6	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(微)	にぶい黄橙(10YR7/3)	普通	完形 ナデ	床面	
9	支脚	(17.2)	8.8	(9.0)	-	白色粒子(少)・透明 粒子(少)・白雲母(少)	にぶい黄橙(10YR6/4)	普通	円錐状に整形 上面を平坦に仕 上げている	床面	二次焼成 痕有り

第4号住居跡（第6図 PL7・8）

位置 B2b6区に位置している。

規模と形状 北側が調査区域外に延びていて、北西・南東軸は5.04m、北東・南西軸は1.62mしか確認できない。平面形と主軸方向は不明である。壁高は、調査区壁の土層断面で最大34cmを測り、直立している。床 ほぼ平坦な貼床で、硬化面は壁際付近を除いて確認した。壁溝は南東壁下で認められる。P2の内側には、幅17cm、深さ12cmの溝があり、調査区域外にさらに延びる。火を受けて焼けた部分を2か所確認したが、炭化材などは認められない。

ピット 2か所。P1は北西・南東軸66cm、北西・南西軸は27cmまでしか確認できず、深さは30cmである。P2は長径55cm、短径42cm、深さ36cmである。P2は位置と規模から主柱穴と考えられる。P1の性格は不明である。覆土は、ロームブロックを含まない暗褐色土を基調としている。

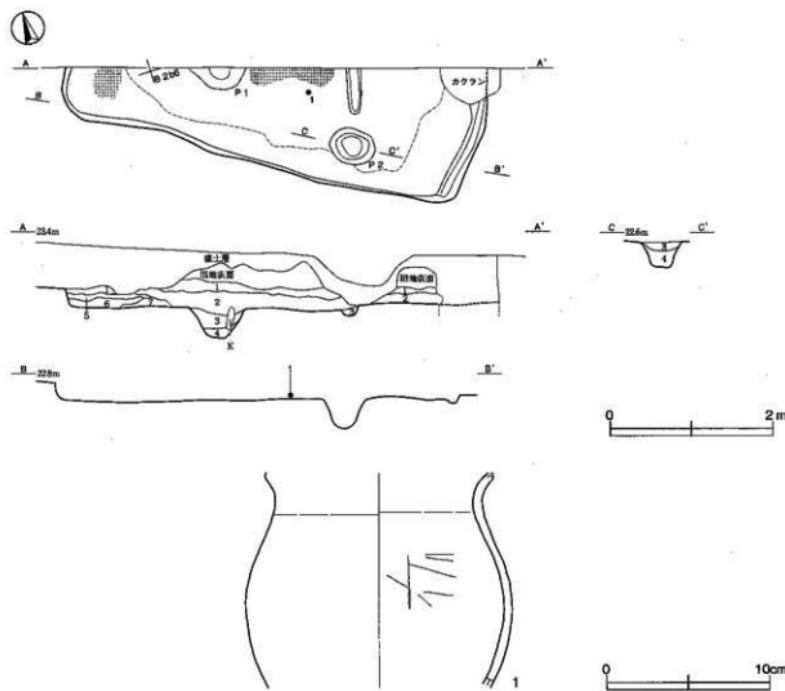
覆土 7層に分層できる。第3・4層はP1・P2の覆土であり、ロームブロックをわずかにしか含まない暗褐色土を基調としている。第6層は、焼けた床面のすぐ上に堆積している層で、焼土ブロックを多く含む。

土層解説

- | | | | |
|----------------|---------------------------|----------------|---------------------------|
| 1 暗褐色(10YR3/4) | ロームブロック・ローム粒子・炭化
粒子微量 | 5 暗褐色(10YR3/3) | ローム粒子多量 |
| 2 細褐色(10YR3/3) | ロームブロック少量・焼土粒子・炭
化粒子微量 | 6 暗褐色(10YR3/4) | 焼土ブロック少量・ローム粒子・炭化
粒子微量 |
| 3 暗褐色(10YR3/3) | ロームブロック・ローム粒子微量 | 7 暗褐色(10YR3/4) | ローム粒子多量 |
| 4 暗褐色(10YR3/4) | ローム粒子多量 | | |

遺物出土状況 遺物はすべて覆土中から出土している。土器片はすべて細片もしくは小片であり、完形品は無い。1と同じ層位からは、須恵器模倣坏が出土しているが、小片のため図示できない。

所見 遺物の時期は、古墳時代後期と考えられる。



第6図 第4号住居跡実測図・出土遺物実測図

表3 第4号住居跡出土遺物観察表（第6図）

1	土器部	要	-	(132)	-	白色粒子（多）・透明 粒子（多）・白雲母（多）	粗 (7.5YR7/6)	普通 口縁部外・内面横ナナ 面ナナ	体部外 内面ヘラナナ	覆土中	
---	-----	---	---	-------	---	----------------------------	-----------------	-------------------------	---------------	-----	--

第6号住居跡（第7図 P.L.9）

位置 A 215区に位置している。

規模と形状 東側は調査区域外に延びており、調査した部分のほとんどが搅乱を受けているため、北壁と床面の一部だけを確認した。規模および形状と主軸方向は不明である。整高は48cmで、直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、硬化面を確認した。

覆土 7層に分層できる。ロームブロックを含む暗褐色土を基調としている。不規則に堆積していることから人為堆積と考えられる。

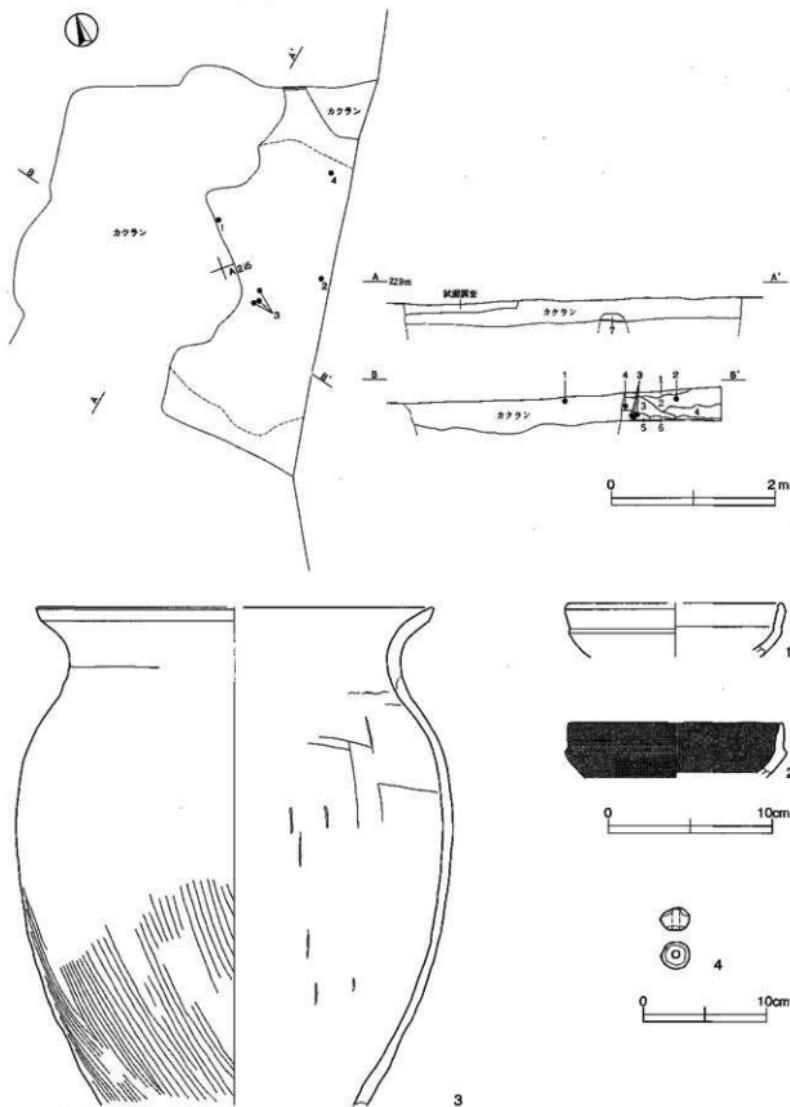
土層解説

- | | | | |
|-----------------|------------------------------|-----------------|-------------------|
| 1 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒子微量 | 5 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒子多量、ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 (10YR3/3) | ロームブロック・ローム粒子中量、
炭化粒子微量 | 6 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒子多量、ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒子中量、ロームブロック
少量、炭化粒子微量 | 7 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒子多量 |
| 4 暗褐色 (10YR3/4) | ロームブロック・ローム粒子中量、
炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 遺物はすべて覆土中から出土している。土器片の多くは細片もしくは小片であり、完形品は無い。

1・2・4は覆土上層から、3は覆土下層から出土している。

所見 遺物の時期は、6世紀後半と考えられる。



第7図 第6号住居跡実測図・出土遺物実測図

表4 第6号住居跡出土遺物観察表（第7図）

1	土師器	壺	[13.2]	(3.3)	-	白色粒子（少）・透明粒子（少）・白雲母（微）	にぶい橙（7.5YR6/4）	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土上層	
2	土師器	壺	[13.2]	(3.4)	-	白色粒子（少）・透明粒子（少）・白雲母（微）	-	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土上層	
3	土師器	壺	[24.2]	(30.8)	-	白色粒子（多）・透明粒子（多）・白雲母（少）	にぶい黄橙（10YR7/4）	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上半ナデ・下半ハラ磨き 内面ヘラナデ・ナデ	覆土上層	
4	瓦	18	24	85	0.8	白色粒子・透明粒子	橙（5YR6/6）	普通	元形 ナデ	覆土上層	

2 奈良・平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡2軒を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

竪穴住居跡

第1号住居跡（第8～10図 PL 2～5）

位置 B 2d9 区に位置している。

重複関係 第3・6号土坑、第1号ピットより古く、第3号住居跡より新しい。

規模と形状 北東・南西軸4.70m、北西・南東軸4.00m のやや東西に長い方形で、主軸方向はN-68°-Wである。壁高は最大29cmで、直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、竪前面からP1～P4の内側に硬化面が広がる。特にP4付近は、周囲より少し高い。壁溝は北東、南東、南西の各壁下で確認した。

竪 北西壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで150cm、煙道部の最大幅85cm、煙道部は壁外に75cm伸びている。左袖部は、多量の砂と少量のロームブロックを含む褐灰色粘土を床面の上に積み上げて構築している。右袖部は基部だけが床面に残っている。左袖部の内側は焼けて赤変している。竪土層断面の第1～3層は、竪構築材の褐灰色粘土が崩れた層で、第2層は焼けて赤変している。袖部および崩れた竪構築材には、焼けて器面が剥落した土器の細片が含まれている。第4層は炭層、第5層は灰層である。第6層は竪構築材の崩落前に流入した暗褐色土である。

竪土層解説

- 1 褐灰色（10YR5/1） 砂多量、焼土ブロック中量
- 2 赤色（10R4/8） 焼けて赤変した粘土
- 3 褐灰色（10YR5/1） 砂多量、焼土粒子中量
- 4 黒（10YR1.7/1） 灰層

- 5 灰白（10YR7/1） 灰層
- 6 暗褐色（10YR3/4） ローム粒子多量
- 7 褐灰色（10YR5/1） 砂多量、ロームブロック少量

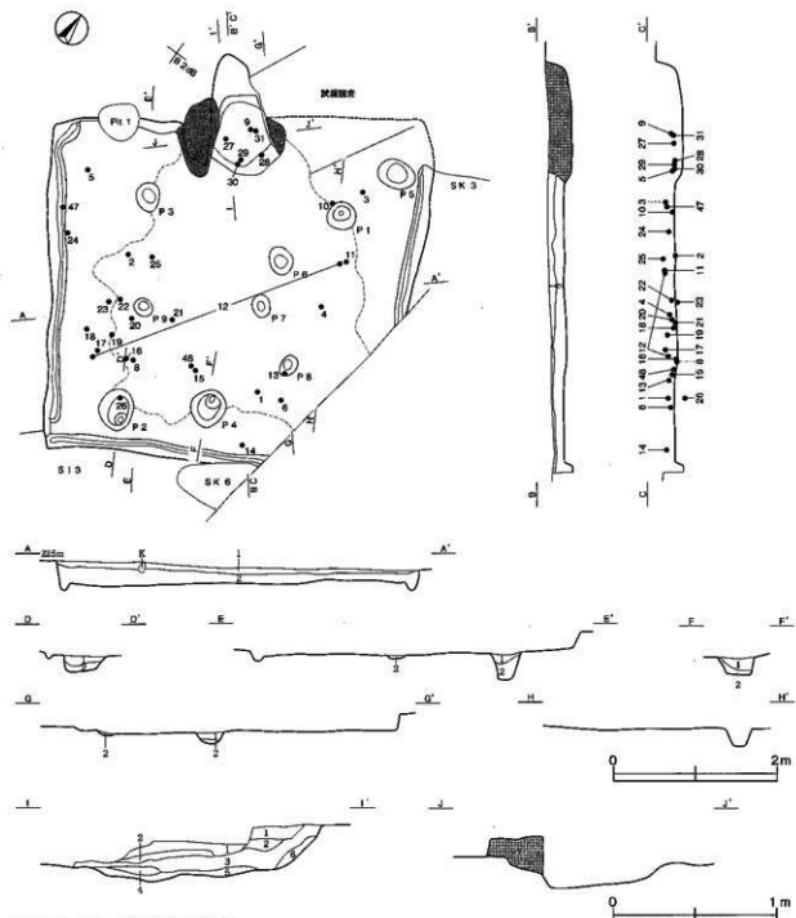
ピット 9か所。P1は長径35cm、深さ21cm、P2は長径51cm、短径41cm、深さ20cm、P3は長径37cm、短径28cm、深さ33cmである。P1～P3は位置と規模から主柱穴と考えられる。P4は長径47cm、短径43cm、深さ22cmで、位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5は長径47cm、短径36cm、深さ23cm、P6は長径35cm、短径27cm、深さ16cmである。

P7～P9は掘り方が明確でなく、床面が深さ2.7～6cmくぼむ。P7の底面は長径12cm、短径8cm、P8の底面は長径12cm、短径10cm、P9の底面は長径12cm、短径11cmである。底面はすべて硬化している。

すべてのピットの覆土は、暗褐色土を基調としている。

ピット土層解説（P1～P9共通）

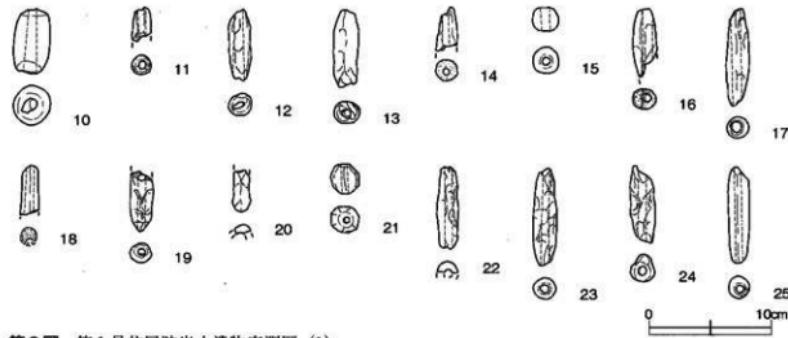
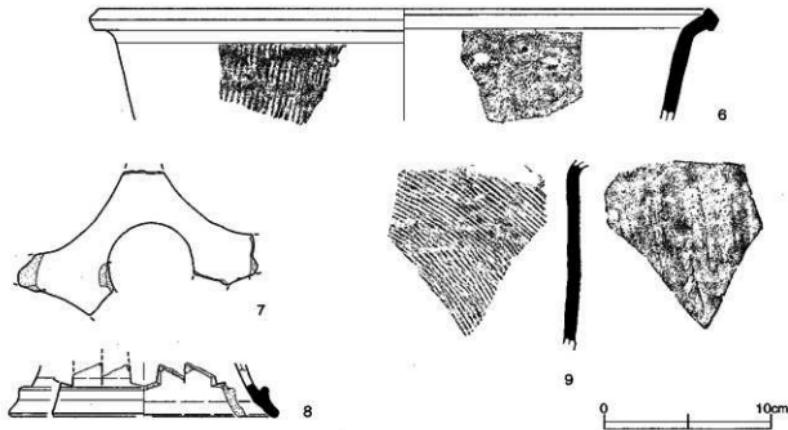
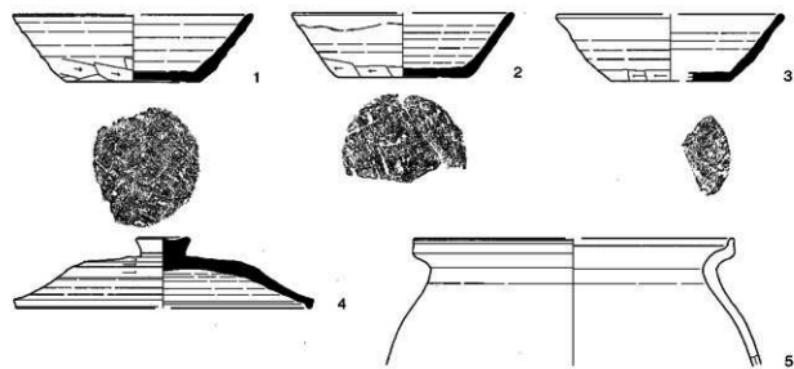
- | | |
|---------------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗褐色（10YR3/4） ロームブロック・ローム粒子少量 | 2 暗褐色（10YR3/4） ローム粒子多量 |
| 覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含まない暗褐色土を基調としている。 | |
| 土層解説 | |
| 1 暗褐色（10YR3/3） ローム粒子少量 | 2 暗褐色（10YR3/4） ローム粒子中量、ロームブロック少量 |



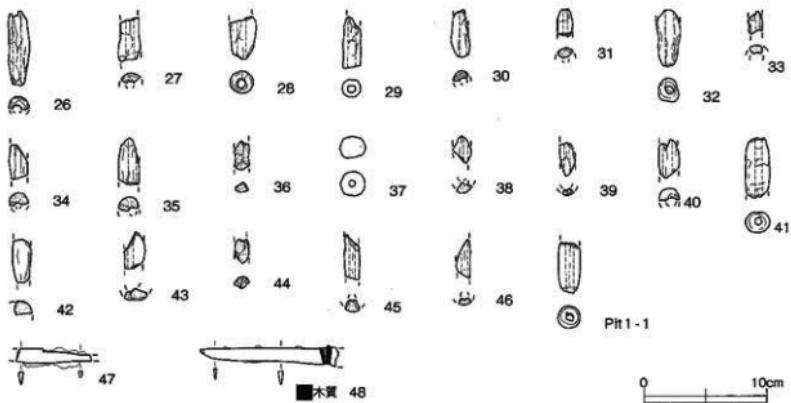
第8図 第1号住居跡実測図

遺物出土状況 遺物は覆土中を中心に出土しており、床面から出土したものは少ない。土器片の多くは細片もしくは小片であり、完形品はない。土器、土製品、鉄製品の出土層位は、種別ごとに分別できるものではなく、すべてが混在している。1・3・4は覆土中のほぼ同じ層位から、2は床面から出土している。8は床面より3cmほど上の位置から出土している。管状土錐の出土層位は、16・21・23が床面から、26はP2の覆土第1層中から、それ以外は、覆土中もしくは27~31・38・40・45・46のように、竪土層第3層中から出土している。竪土層第3層中から出土している管状土錐は、すべて破片である。47・48は覆土中から出土している。第1号ピットから出土した管状土錐は、本住居からの混入である。

所見 遺物の時期は、9世紀第1四半期と考えられる。



第9図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第10図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

表5 第1号住居跡出土遺物観察表(第9・10図)

1	須恵器 壺	[14.8]	42	82	白色粒子(多)・透明 粒子(少)・白雲母(少)	灰 (5YR6/1)	普通 体部下端手持ちヘラ削り 底部一定方向の手持ちヘラ削り	覆土中	
2	須恵器 壺	[13.6]	40	80	白色粒子(多)・透明 粒子(少)・白雲母(少)	灰 (N5/)	普通 体部下端手持ちヘラ削り 底部二方向(井桁状)の手持ちヘラ削り	床面	底部墨書き 「□」
3	須恵器 壺	[14.0]	41	[7.4]	白色粒子(多)・透明 粒子(多)・白雲母(少)	灰 (5Y5/1)	普通 体部下端手持ちヘラ削り 底部手持ちヘラ削り	覆土中	
4	須恵器 壺	[18.0]	44	-	白色粒子(多)・透明 粒子(少)・白雲母(微)	灰 (5Y6/1)	普通 天井部回転ヘラ削り 端部を下方へ極く屈曲させる 滑部外面に面を形成 鉢高 12cm・鉢径 3.3cm	覆土中	
5	土器 甕	[19.8]	(7.9)	-	白色粒子(多)・透明 粒子(多)・白雲母(多)	にぶい黄土 (10YR6/4)	普通 口縁部外・内面模ナデ 体部外・内面ナデ	覆土中	
6	須恵器 瓶	[37.5]	(6.9)	-	白色粒子(多)・透明 粒子(多)・白雲母(多)	灰 (5Y5/1)	普通 口縁部外・内面模ナデ 外面縦位の平行叩き目 内面ナデ	覆土中	
7	須恵器 瓶	-	-	-	白色粒子(少)・透明 粒子(少)・白雲母(多)	黄灰 (25Y6/1)	普通 孔は5か所	覆土中	
8	須恵器 円筒 硯	-	(3.2)	-	白色粒子(多)・透明 粒子(多)・白雲母(微)	灰 (5Y5/1)	普通 脚部径 [16.0]cm 方形の透孔と粒度のスリット	床面より 3cmほど上	
9	須恵器 甕	-	(11.3)	-	白色粒子(少)・透明 粒子(少)・白雲母(多)	黄灰 (25Y6/2)	普通 外面斜位の平行叩き目 内面縦方向のナデ 器面に焼土付着	覆土層 第3層中	
10	管状 土器	5.3	29	44.6	0.9 ~ 1.3 白色粒子・透明粒子・ 白雲母(微)	灰 (5Y4/1)	完形 ナデ	覆土中	

番号	土種	年数	色調	粒度	性状	評定	欠損	ナデ	覆土中	床面
11	管状土錐	(2.5)	1.5	(47)	0.7 ~ 透 明 粒 子・白 霧 母 0.9 (微)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	不 良	欠損 ナデ	覆土中	
12	管状土錐	5.8	1.8	13.0	0.7 ~ 白 霧 母 (微) 1.2	にぶい黄橙 (10YR7/4)	不 良	完形 ナデ	覆土中	
13	管状土錐	6.3	2.0	19.2	0.7 ~ 透 明 粒 子・白 霧 母 1.0 (微)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	不 良	完形 ナデ	覆土中	
14	管状土錐	(3.2)	1.7	(6.9)	0.6 白 霧 母 (微)	灰 黄 (2.5YR7/2)	不 良	欠損 ナデ	覆土中	
15	球状土錐	1.9	2.1	7.2	0.8 白 霧 母 (微)	明 費 橙 (10YR6/6)	不 良	完形 ナデ	覆土中	
16	管状土錐	(5.6)	1.9	(12.3)	0.5 白 霧 母 (微)	黄 灰 (2.5Y5/1)	不 良	欠損 ナデ	床面	
17	管状土錐	7.9	1.9	19.8	0.7 ~ 透 明 粒 子・白 霧 母 0.8 (微)	灰 黄 (2.5YR7/2)	不 良	完形 ナデ	覆土中	
18	管状土錐	(4.1)	1.5	(6.9)	0.7 白 霧 母 (微)	灰 黄 (2.5Y7/2)	不 良	欠損 ナデ	覆土中	
19	管状土錐	(5.0)	1.8	(12.0)	0.7 白 霧 母 (微)	灰 白 (2.5Y7/1)	不 良	欠損 ナデ	覆土中	
20	管状土錐	(3.5)	1.5	(3.2)	0.5 白 露 母 (微)	灰 黄 (2.5Y6/2)	不 良	欠損 ナデ	覆土中	
21	球状土錐	2.5	2.3	12.3	0.5 白 露 母 (微)	明 費 橙 (5YR5/8)	不 良	完形 ナデ	床面	
22	管状土錐	6.8	1.8	(9.9)	0.6 白 露 母 (微)	灰 黄 (2.5Y7/2)	不 良	欠損 ナデ	覆土中	
23	管状土錐	8.0	1.9	22.6	0.6 ~ 白 霧 母 (微) 0.8	樱 (7.5YR6/6)	不 良	完形 ナデ	床面	
24	管状土錐	6.3	2.0	20.3	0.7 白 露 母 (微)	灰 (5YR5/1)	不 良	完形 ナデ	覆土中	
25	管状土錐	7.9	1.7	(22.2)	0.6 白 露 母 (微)	淡 黄 (2.5Y8/3)	不 良	欠損 ナデ	覆土中	
26	管状土錐	6.1	1.6	(8.2)	0.6 透 明 粒 子・白 霧 母 ~ 0.8 (微)	灰 黄 (2.5Y7/2)	不 良	欠損 ナデ	P 2 覆土 第 1 層	
27	管状土錐	(3.6)	1.8	(3.9)	0.6 白 露 母 (微)	灰 黄 (2.5Y7/2)	不 良	欠損 ナデ	覆土層 第 3 層 中	
28	管状土錐	(3.5)	2.2	(10.0)	0.8 白 露 母 (微)	灰 黄 (2.5Y6/2)	不 良	欠損 ナデ 一部焼けている	覆土層 第 3 層 中	
29	管状土錐	(4.2)	1.5	(8.1)	0.6 透 明 粒 子・白 霧 母 (微)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	不 良	欠損 ナデ 一部焼けている	覆土層 第 3 層 中	
30	管状土錐	(3.9)	1.5	(3.1)	0.5 白 露 母 (微)	白 露 母 (微)	黄 橙 (7.5YR7/6)	不 良	欠損 ナデ	覆土層 第 3 层 中
31	管状土錐	(2.2)	1.3	(1.8)	0.5 透 明 粒 子・白 霧 母 (微)	白 露 母 (微)	にぶい樱 (7.5YR7/4)	不 良	欠損 ナデ	覆土層 第 3 层 中
32	管状土錐	(4.7)	1.9	(10.8)	0.7 白 露 母 (微)	白 露 母 (微)	にぶい樱 (10YR7/3)	不 良	欠損 ナデ	覆土中
33	管状土錐	(1.8)	1.1	(1.0)	- 白 露 母 (微)	白 露 母 (微)	黄 灰 (2.5YR6/1)	不 良	欠損 ナデ	覆土中
34	管状土錐	(2.8)	1.5	(3.0)	0.5 透 明 粒 子・白 霧 母 (微)	白 露 母 (微)	灰 黄 (2.5Y6/2)	不 良	欠損 ナデ	覆土中
35	管状土錐	(3.8)	1.7	(5.5)	0.5 白 露 母 (微)	白 露 母 (微)	灰 黄 (2.5YR7/2)	不 良	欠損 ナデ	覆土中

36	管状 土錐	(2.4)	(1.3)	(1.6)	-	白色粒子・透明粒子	灰白 (10YR8/2)	不良	欠損 ナデ	覆土中	
37	球状 土錐	1.8	2.1	6.7	- 0.7	白色粒子・透明粒子	黄灰 (25Y5/1)	普通	光沢 ナデ	床面	
38	管状 土錐	(2.2)	1.5	(1.5)	0.5	白色粒子・透明粒子	灰白 (10YR8/2)	不良	欠損 ナデ	覆土層 第3層中	
39	管状 土錐	(2.7)	(1.2)	(1.3)	0.5	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(幾)	橙 (7.5YR7/6)	不良	欠損 ナデ	P 2 覆土中	
40	管状 土錐	(3.2)	1.7	(3.2)	0.6 - 0.7	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(幾)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	不良	欠損 ナデ	覆土層 第3層中	
41	管状 土錐	(4.9)	2.0	(13.0)	0.6	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(幾)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	不良	欠損 ナデ	覆土中	
42	管状 土錐	(3.5)	1.5	(6.7)	-	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(幾)	灰 (5Y5/1)	不良	欠損 ナデ	覆土中	
43	管状 土錐	(3.0)	(1.7)	(3.9)	0.5	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(幾)	灰 (5Y5/1)	不良	欠損 ナデ	覆土中	
44	管状 土錐	(2.0)	(1.2)	(1.4)	-	白色粒子・透明粒子	灰白 (25Y8/2)	不良	欠損 表面剥離	覆土中	
45	管状 土錐	(3.7)	1.2	(2.9)	0.4	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(幾)	淡黄 (25Y8/3)	不良	欠損 ナデ	覆土層 第3層中	
46	管状 土錐	(3.2)	(1.1)	(1.5)	0.6	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(幾)	淡黄 (25Y8/3)	不良	欠損 ナデ	覆土層 第3層中	
Pit1 -1	管状 土錐	(4.2)	1.8	(10.5)	0.9	白色粒子・透明粒子	浅黄 (25Y7/3)	普通	欠損 ナデ	Pit1 覆土中	

47	刀子	(6.2)	1.2	(8.2)	欠損 片調		覆土中	
48	刀子	(11.1)	1.3	(15.6)	欠損 木質残存		覆土中	

第2号住居跡 (第 11・12図 PL 2・5・6)

位置 B 2 f7 区に位置している。

規模と形状 3か所のコーナーが確認でき、北西・南東軸は 6.80 m、北東・南西軸 6.42 m の方形である。主軸方向は、P 1 と P 2 の中心を結ぶラインで測ると N - 53° - W である。壁高は最大 60cm で、直立している。床 ほぼ平坦な貼床で、P 1 ~ P 3 の内側に硬化面が広がる。壁溝は北東、北西、南東の各壁下で確認した。ピット 3か所。P 1 は長径 32cm、短径 28cm、深さ 47cm、P 2 は長径 35cm、短径 30cm、深さ 45cm、P 3 は長径 31cm、短径 28cm、深さ 37cm である。P 1 ~ P 3 は、位置と規模から主柱穴と考えられる。覆土は、ロームブロックを多量に含む暗褐色土および褐色土を基調としている。

ピット土層辨別 (P 1 ~ P 3 共通)

1 暗褐色 (10YR3/4) ロームブロック・ローム粒子多量

2 暗褐色 (10YR4/4) ロームブロック・ローム粒子多量

覆土 6 層に分層できる。第 1・3・4 層は、ロームブロックをわずかにしか含まない暗褐色土および黒褐色土を基調とし、第 5 層はロームブロックを多量に含む暗褐色土である。第 6 層は、壁際で堆積したロームブロックを含まない暗褐色土である。第 2 層には焼土ブロックや褐灰色粘土のほか、焼けた雲母片岩が混ざっており、遺構構築材を廃棄したものと考えられる。

土層辨別

1 暗褐色 (10YR3/4) ロームブロック少量

4 暗褐色 (10YR3/3) ロームブロック少量、ローム粒子微量

2 暗褐色 (10YR3/3) 焼土ブロック・粘土ブロック多量、
ローム粒子少量

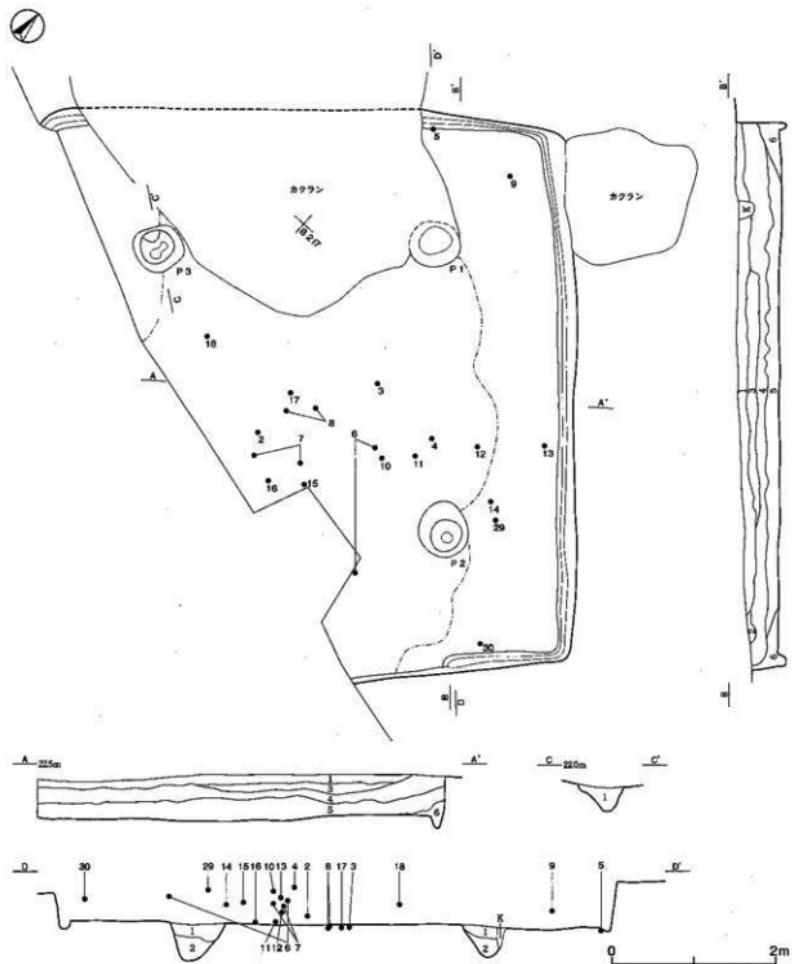
5 暗褐色 (10YR3/4) ロームブロック多量、ローム粒子微量

3 黒褐色 (10YR3/2) ロームブロック・ローム粒子少量

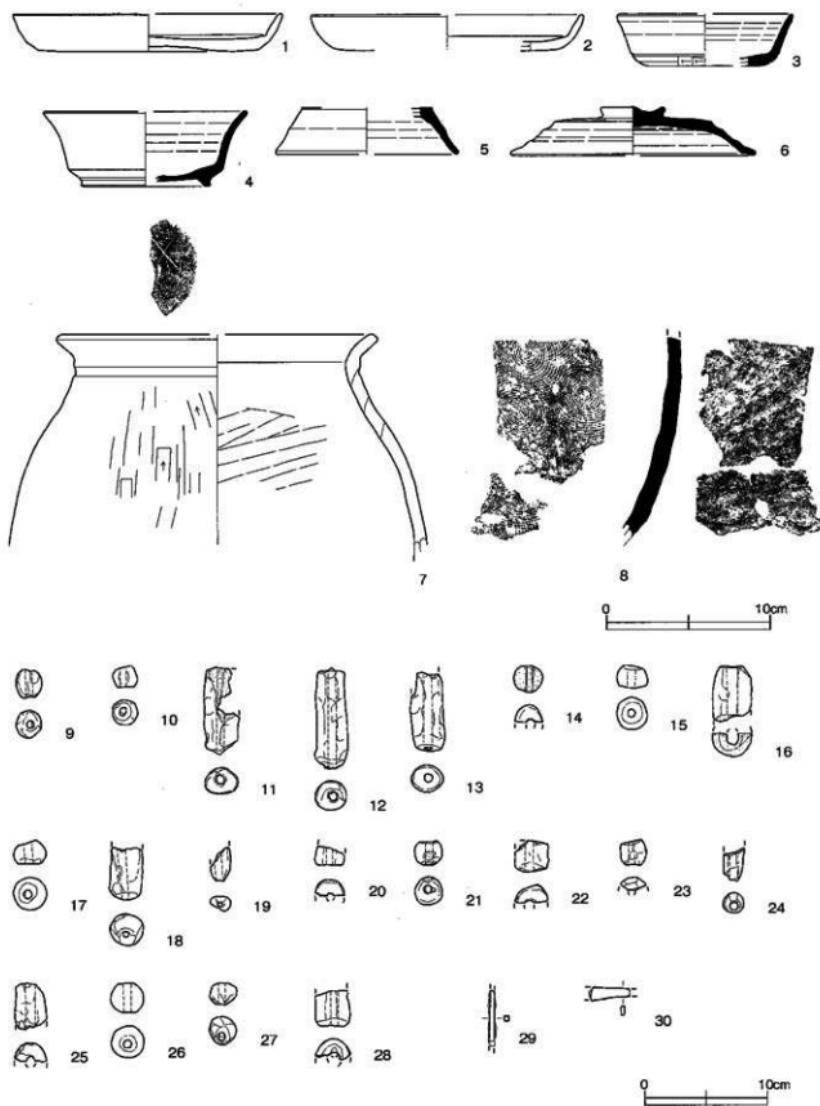
6 暗褐色 (10YR3/3) ローム粒子多量

遺物出土状況 遺物は覆土中を中心に出土しており、床面から出土したもののは少ない。土器片の多くは細片もしくは小片であり、完形品は無い。1・2のように、同じ形態の土器が異なる層位から出土している。1は覆土第1層から第4層までの間から、別々に出土した破片が接合したもの、2は覆土第5層中から出土している。3は床面から、4は覆土第1層中から出土している。6は覆土第1層と第3層から、別々に出土した破片が接合したものである。5・8・17は床面から出土している。土製品は20点出土している。そのうちの15点が、覆土第4層から第5層までの間から出土している。29は第1層中、30は第4層中から出土している。

所見 遺物の時期は、8世紀後半期と考えられる。



第11図 第2号住居跡実測図



第12図 第2号住居跡出土遺物実測図

表6 第2号住居跡出土遺物実測図(第12図)

1	土師器	壺	[16.6]	23	13.6	白色粒子(多)・透明 粒子(多)・白雲母(少)	楕 (25YR6/8)	良	外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	第1層～第4 層中
2	土師器	壺	[16.8]	22	[14.1]	白色粒子(多)・透明 粒子(多)・白雲母(多)	明赤褐色 (5YR5/6)	良	外面ヘラ削り後ナデ 内面ナデ	第5層中
3	須恵器	壺	[10.8]	3.2	[7.0]	白色粒子(多)・透明 粒子(多)・白雲母(少)	黄灰 (25Y6/1)	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部 手持ちヘラ削り	床面
4	須恵器	高台 付壺	[12.6]	4.6	[8.0]	白色粒子(多)・透明 粒子(多)	灰 (N5/0)	普通	底部回転ヘラ削り後高台接合 底部の厚さ3mm	床面 底面へ タ記号 「+」
5	須恵器	壺	[11.2]	29	-	白色粒子・透明粒子	灰 (75Y5/1)	普通	天井部回転ヘラ削り	第1層中
6	須恵器	壺	[15.1]	3.0	-	白色粒子(多)・透明 粒子(多)・白雲母(多)	浅黄 (25Y7/3)	普通	天井部回転ヘラ削り 軒高 0.7cm・横径3.8cm かえりに粘 土紐の接合痕は無い	第1層・ 第3層
7	土師器	壺	[19.8]	(129)	-	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子	にぶい橙 (75YR6/4)	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外 面ヘラ削り 内面ヘラナデ	第4層中
8	須恵器	壺	-	(125)	-	白色粒子(多)・透明 粒子(多)・白雲母(多)	暗灰 (N3/)	普通	外面同心円文の印目 内面ナ デ	床面

9	球状 土錐	23	21	9.7	0.7	白色粒子・透明粒子 白色粒子・透明粒子・ 白雲母(微)	楕 (75YR6/6) オリーブ黒 (5Y3/1)	普通 普通	完形 ナデ 完形 ナデ	第4層中 第1層中
10	球状 土錐	23	21	7.1	0.7	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子・白雲母(微)	黄灰 (25Y4/1)	普通	欠損 ナデ	第5層中
11	管状 土錐	7.2	29	(31.8)	0.8	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子・白雲母(微)	楕 (10YR4/1)	普通	完形 ナデ	第5層中
12	管状 土錐	83	21	56.0	0.7	白色粒子・赤色粒子・ 白雲母(微)	オリーブ黒 (5Y3/1)	普通	欠損 ナデ	第3層中
13	管状 土錐	(6.5)	27	(39.4)	0.7	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子・白雲母(微)	黒褐色 (10YR4/1)	普通	欠損 ナデ	第4層中
14	球状 土錐	22	24	(6.7)	0.7	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(微)	にぶい橙 (75YR6/4)	普通	欠損 ナデ	第4層中
15	球状 土錐	(1.6)	25	(10.7)	0.6	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子	にぶい橙 (10YR4/1)	普通	欠損 ナデ	第4層中
16	管状 土錐	(4.4)	32	(22.0)	0.7	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子・白雲母(微)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	普通	欠損 ナデ	第5層中
17	球状 土錐	19	27	12.2	0.5	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子・白雲母(微)	にぶい橙 (75YR7/4)	普通	完形 ナデ	床面
18	管状 土錐	(4.2)	27	(27.6)	0.6	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子・白雲母(微)	明赤褐色 (5YR5/6)	普通	欠損 ナデ	第4層中
19	管状 土錐	(2.7)	1.7	(3.5)	0.5	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子・白雲母(微)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	不良	欠損 ナデ 孔は貫通していな い	第4層中
20	管状 土錐	(1.5)	24	(4.5)	0.6	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子・白雲母(微)	褐灰 (10YR4/1)	普通	欠損 ナデ	第5層中
21	球状 土錐	2.0	22	(9.4)	0.7	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(微)	にぶい褐 (75YR5/4)	普通	欠損 ナデ	床面
22	球状 土錐	2.6	28	(9.9)	0.6	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(微)	暗灰黄 (25Y5/2)	普通	欠損 ナデ	第4層中

番号	土種	粒度			色	風化度	状態	層位
		2.2	2.1	(3.9)				
23	管状 土錐	0.3	白色粒子・透明粒子	灰黄 (25Y7/2)	不良	欠損 ナデ	第5層中	
24	管状 土錐	(2.8)	1.7	(4.5)	0.6	白色粒子・透明粒子	にぶい黄程 (10YR7/4)	不良 欠損 ナデ
25	管状 土錐	(3.8)	2.6	(12.6)	0.7	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子・白雲母(微)	暗灰黄 (25Y4/2)	普通 欠損 ナデ
26	球状 土錐	2.4	2.7	15.4	0.7	白色粒子・透明粒子・ 白雲母(微)	橙 (5YR6/6)	普通 完形 ナデ
27	管状 土錐	2.8	2.2	7.5	0.7	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子・白雲母(微)	にぶい程 (7.5YR6/4)	普通 完形 ナデ
28	管状 土錐	(3.0)	2.9	(12.6)	0.7	白色粒子・赤色粒子・ 透明粒子・白雲母(微)	灰黄褐 (10YR5/2)	欠損 ナデ
29	筋繩草	(4.6)	0.5	(2.6)	欠損	輪部 断面方形	第1層中	
30	刀子	(3.2)	1.1	(3.4)	欠損	基部	第4層中	

3 その他の遺構と遺物

時期や性格が不明な堅穴住居跡2軒、土坑7基、溝跡2条、ピット19基を確認した。以下、堅穴住居跡のほか、遺物が出土しているおよび特徴のある遺構と遺物について記述する。

なお、遺物が出土していない第1～3・6号土坑とピット19基については、一覧表で掲載した。

(1) 堅穴住居跡

第5号堅穴住居跡（第13図 PL8）

位置 A1g6区に位置している。

規模と形状 北西・南東軸 292 m、北東・南西軸 270 m の方形で、主軸方向は N - 65° - W である。壁高は最大15cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、地山のロームを床面としている。硬化面は確認できない。

竈 北西壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 96cm、燃焼部の最大幅 60cm、煙道部は壁外に 57cm 延びている。袖部は、多量の砂と少量のロームブロックを含む褐色粘土を床面の上に積み上げて構築しており、内側は焼けた赤茶色をしている。袖部に土器片は含まれていない。火床面は床面とほぼ同じ高さにあり、焼けた赤茶色をしている。竈土層断面の第1～4層は流入した暗褐色土で、竈構築材の崩落土および灰などは認められない。第5層は、火床面の上に堆積した焼土である。

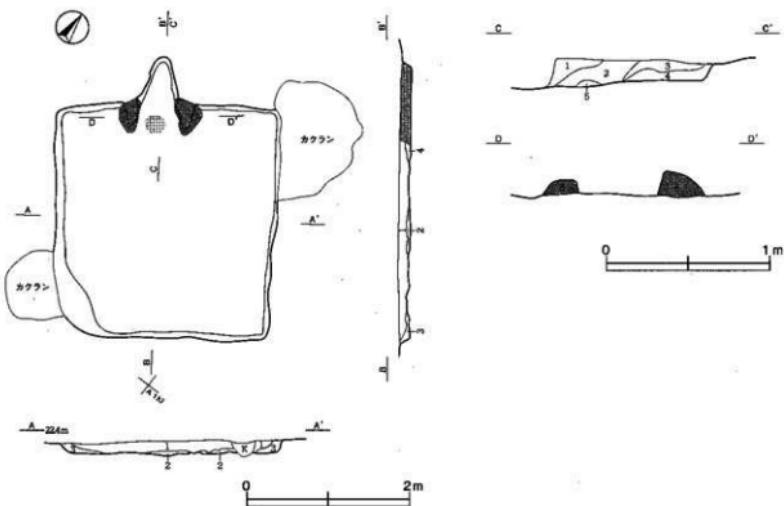
竈土層解説

- | | |
|---|-------------------------------|
| 1 暗褐色 (10YR3/4) ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 (10YR3/3) ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 (10YR3/4) 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 | 5 赤色 (10R4/8) 烧土塊 |
| 3 暗褐色 (10YR3/4) 烧土ブロック中量、粘土ブロック
少量、ローム粒子微量 | 6 黒灰色 (10YR5/1) 砂多量、ロームブロック少量 |

覆土 4層に分層できる。ロームブロックをわずかにしか含まない暗褐色土および黒褐色土を基調としている。

土層解説

- | | |
|---|--------------------------------|
| 1 暗褐色 (10YR3/3) ロームブロック・ローム粒子・焼土
粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 (10YR3/4) ローム粒子多量 |
| 2 暗褐色 (10YR3/4) ローム粒子多量、ロームブロック
微量 | 4 暗褐色 (10YR3/4) ローム粒子少量、焼土粒子微量 |



第13図 第5号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器の小片が覆土中からごくわずかに出土している。その中に小片で図示できないが、内面黒色処理のロクロ成形土師器が認められる。

所見 遺物の時期は、出土土器が小片のため明確にできないが、内面黒色処理されたロクロ成形の土師器片が出土していることから、平安時代の可能性がある。

第7号住居跡（第14図 PL 9）

位置 A 2d7 区に位置している。

規模と形状 東側が調査区域外に延びており、調査部分は遺構確認面ですでに床面が露出している。確認した床面の範囲は、北東・南西軸 6.21 m、北西・南東軸は 3.91 m しか確認できない。平面形は不明である。主軸方向は、竈を通る軸線を床面の北西ラインと平行させて測ると、N - 42° - E である。

床 ほぼ平坦な貼床で、硬化面が部分的に認められる。壁溝は確認できない。

竈 北東壁に付設されている。袖部の基部と考えられる褐灰色粘土と火床面と思われる焼土範囲を確認した。褐灰色粘土内側の最大幅は 60cm である。

ピット 3か所。P 1は長径 32cm、短径 26cm、深さ 12cm、P 2は長径 44cm、短径 42cm、深さ 10cm、P 3は長径 32cm、短径 26cm、深さ 26cm である。これらのピットは線上に並び、覆土は暗褐色土を基調としている。

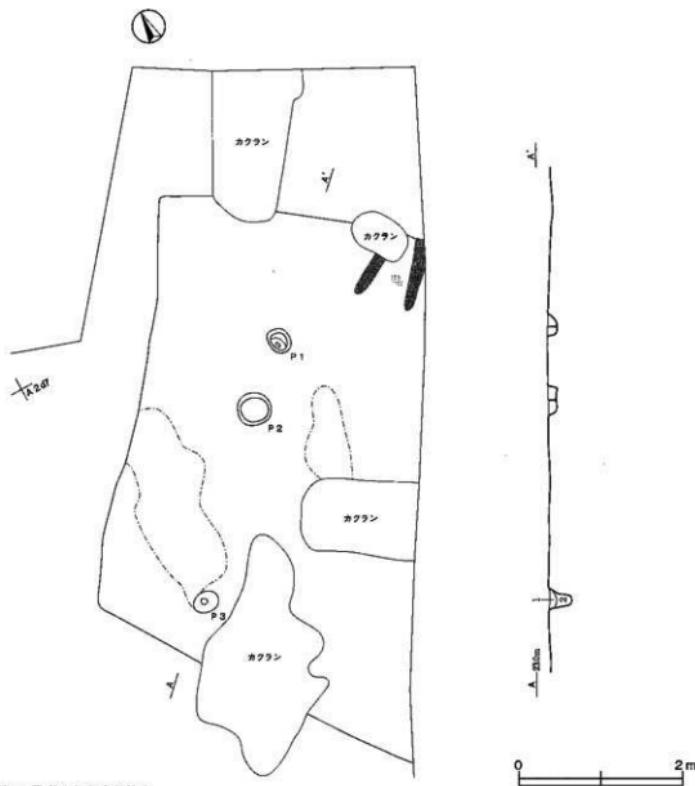
ピット土層解説 (P 1～P 3共通)

1 暗褐色 (10YR3/3) ローム粒子少量

2 暗褐色 (10YR3/4) ローム粒子多量

遺物出土状況 P 3の覆土中から、土師器の細片が1点出土している。

所見 遺物の時期は、出土土器が細片のため不明である。



第14図 第7号住居跡実測図

(2) 土坑

第4号土坑（第15図）

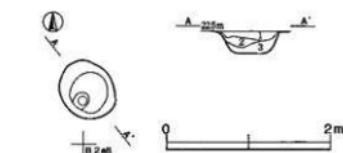
位置 B 2 d8 区に位置している。

規模と形状 長径 76cm、短径 64cm、深さ 27cm の楕円形で、長径方向は N - 40° - W である。壁は外傾して立ち上がっていいる。底面には径 20cm、深さ 14cm の円形のビットがある。ビットの底面は硬化していない。

覆土 3 層に分層できる。ロームブロックを含まない暗褐色土を基調としている。

土層解説

- | | |
|-----------------|---------|
| 1 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒子微量 |

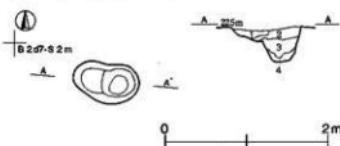


第15図 第4号土坑実測図

遺物出土状況 土師器の細片がごくわずかに出土している。

所見 遺物の時期は、出土土器が細片のため不明である。本土坑は、規模や底面にピットを伴うことなどが、掘立柱建物跡の柱穴に類似している。しかし、覆土が自然堆積と考えられることから、単独の土坑と判断した。

第5号土坑(第16図)



第16図 第5号土坑実測図

位置 B 2d7 区に位置している。

規模と形状 長径 82cm、短径 48cm の楕円形で、長径方向は N - 85° - W である。底面は二段になっており、深さ 12cm・45cm である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4 層に分層できる。ロームブロックを多く含む褐色土および暗褐色土を基調としており、人為堆積と考えられる。

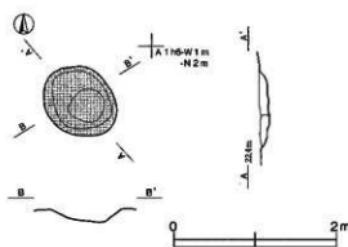
土層解説

1 棕色 (10YR4/6)	ロームブロック多量	3 褐褐色 (10YR3/3)	ロームブロック中量
2 暗褐色 (10YR3/3)	ローム粒子多量、ロームブロック少量	4 褐褐色 (10YR3/4)	ローム粒子多量、ロームブロック少量

遺物出土状況 土器の細片がごくわずかに出土している。

所見 遺物の時期は、出土土器が細片のため不明である。本土坑は、規模や覆土が人為堆積であることなどが、掘立柱建物跡の柱穴に類似している。しかし、覆土の平面および断面観察で柱痕跡が認められないことから、単独の土坑と判断した。

第7号土坑(第17図)



第17図 第7号土坑実測図

位置 A 1g6 区に位置している。

規模と形状 長径 97cm、短径 80cm、深さ 13cm の楕円形で、長径方向は N - 41° - W である。底面は凸凹しており、壁はゆるやかに外傾して立ち上がっている。壁および底面全体が焼けて赤変している。

覆土 単層である。焼土を多量に含む褐色土で、灰層および炭層などは認められない。

土層解説

1 黄色 (10 YR 4 / 6)	焼土ブロック・焼土粒子多量
--------------------	---------------

(3) 溝跡

第1・2号溝跡(第18図)

位置 A 2g5 区と A 2g6 区に、東西 3m の間隔をあけて並んで位置している。

規模と形状 第1号溝跡は東側が調査区域外に延びており、4.1m しか確認できない。幅は 42cm、深さは最大

7cmである。第2号溝跡は長さ6.92m、幅18~42cm、深さは最大17cmで、主軸方向は両溝ともN-35°-Eである。

覆土 両溝ともにロームブロックを含まない暗褐色土である。

土層解説 (SD1・SD2共通)
1 暗褐色(10YR3/3) ローム粒多量

遺物出土状況 第2号溝跡から、土師器と須恵器の細片がごくわずかに出土している。

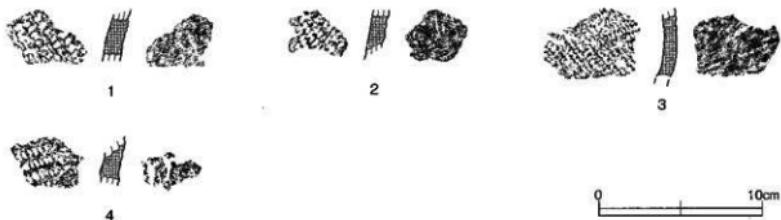
所見 遺物の時期は、出土土器が細片のため不明である。第1・2号溝跡は、位置関係や同じ主軸方向および覆土から同時期のものと考えられる。



第18図 第1・2号溝跡実測図

(4) 遺構外出土遺物 (第19図)

遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものを実測図と遺物観察表で記述する。



第19図 遺構外出土遺物実測図

表7 遺構外出土遺物観察表 (第19図)

1	縄文土器	深鉢	白色粒子(多)・透明粒子(多)・白雲母(多)	にぶい黄褐色(10YR4/3)	普通	単節繩文RL 内面丁寧な調整	SI 3 覆土中	
2	縄文土器	深鉢	白色粒子(多)・透明粒子(多)	褐(7.5YR4/4)	普通	単節繩文RL 内面丁寧な調整	SI 3 覆土中	
3	縄文土器	深鉢	白色粒子(多)・透明粒子(多)・白雲母(微)	明黄褐色(10YR6/6)	普通	単節繩文RL 内面丁寧な調整	SI 6 覆土中	
4	縄文土器	深鉢	白色粒子(多)・透明粒子(多)・白雲母(多)	にぶい黄褐色(10YR6/4)	普通	単節繩文LR	SI 6 覆土中	

表8 竪穴住居跡一覧表

1	B 249	N - 68° - W	方形	4.70 × 4.00	29	貼床	柱跡				新治窯跡群の9世紀第1四半期の須恵器が出土 管状土錐が多く出土
							P 1 ~ P 3	P 4	P 5 ~ P 9	-	
2	B 277	N - 53° - W	方形	6.80 × 6.42	60	貼床	P 1 ~ P 3	-	-	-	新治窯跡群の8世紀第2四半期の須恵器が出土

測定値			測定値			測定値			測定値			測定値		
3	B 2e8	-	-	(450) × (410)	15	貼床	P 1	-	-	-	-	7世紀前半の土師器 杯が出土		
4	B 2b6	-	-	(504) × (162)	34	貼床	P 2	-	P 1	-	-	古墳時代後期の土師 器が出土		
5	A 1g5	N - 65° - W	方形	292 × 270	15	貼床	-	-	-	-	-	北西壁		
6	A 2b5	-	-	-	48	貼床	-	-	-	-	-	6世紀後半の土師器 杯が出土		
7	A 2d7	N - 42° - E	-	(621) × (391)	-	貼床	-	P 1 ～P 3	-	-	-	北東壁		

表9 土坑一覧表

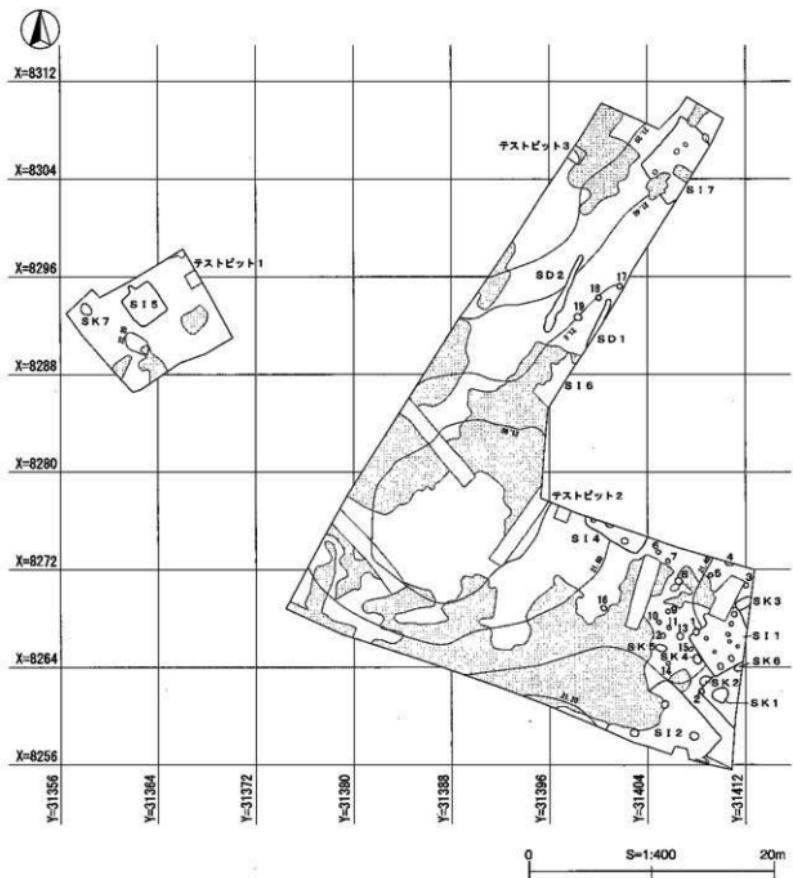
測定値			測定値			測定値			測定値			測定値		
1	B 2e8	-	不整椎円形	128 × 124	13	外傾	平坦	暗褐色	-	-	-	-	-	-
2	B 2e8	N - 46° - E	椎円形	114 × 076	7	外傾	平坦	黒褐色	-	-	-	-	-	-
3	B 2e8	N - 46° - E	椎円形	(130) × (088)	10	外傾	平坦	暗褐色	-	-	-	-	-	-
4	B 2d8	N - 40° - W	椎円形	076 × 064	14	外傾	ピット有	暗褐色	土師器片	-	-	-	-	-
5	B 2d7	N - 85° - W	椎円形	082 × 048	12・45	外傾	二段	暗褐色	土師器片	-	-	-	-	-
6	B 2e8	-	椎円形	080 × 060	46	外傾	平坦	暗褐色	-	-	-	-	-	-
7	A 1g5	N - 41° - W	椎円形	097 × 080	13	外傾	凹凸	褐色	-	-	-	-	-	-

表10 溝跡一覧表

測定値			測定値			測定値			測定値			測定値		
1	A 2g6	N - 35° - E	(4.1)	42	7	暗褐色	-	-	-	-	-	-	-	-
2	A 2g5	N - 35° - E	6.92	18 - 42	17	暗褐色	土師器片	須恵器片	-	-	-	-	-	-

表11 ピット一覧表

測定値			測定値			測定値			測定値			測定値		
1	42 × 36	暗褐色	-	8	52 × 45	暗褐色	-	-	15	36 × 29	暗褐色	-	-	-
2	40 × 36	暗褐色	-	9	30 × 30	暗褐色	土師器片	-	16	43 × 35	暗褐色	-	-	-
3	40 × 36	暗褐色	-	10	30 × 30	暗褐色	-	-	17	40 × 40	暗褐色	-	-	-
4	59 × (19)	暗褐色	-	11	30 × 29	褐色	-	-	18	40 × 38	暗褐色	土師器片	-	-
5	30 × 30	暗褐色	-	12	37 × 37	暗褐色	-	-	19	58 × 53	暗褐色	土師器片	-	-
6	32 × 32	暗褐色	-	13	52 × 46	暗褐色	土師器片	-	-	-	-	-	-	-
7	30 × 24	暗褐色	-	14	32 × 25	暗褐色	-	-	-	-	-	-	-	-



第20図 下高津小学校遺跡遺構全体図（トーン内：搅乱）

第4節　まとめ

今回の調査で、堅穴住居跡7軒、土坑7基、溝跡2条、ピット19基を確認した。ここでは奈良・平安時代の住居跡である第1・2号住居跡について、その出土遺物と遺構の特徴について考察する。

1 出土遺物の年代について

第1・2号住居跡から出土した遺物は、土器（土師器・須恵器）、土製品（管状土錐・球状土錐）、鉄製品（刀子・鍛錘車）である。第1号住居跡からは、管状土錐が第1号ピットに混入した1点も含めると35点、球状土錐3点、そのほか円面鏡が出土していることが特徴的である。第2号住居跡からは、管状土錐と球状土錐両方とも10点出土している。第1・2号住居跡の遺物は覆土中を中心に出土しており、その出土層位は土器、土製品、鉄製品が混在するように出土している。これらは住居廃絶後にまとまって廃棄されたものと考えられる。

第1・2号住居跡出土の須恵器は、胎土に白雲母を含む特徴から新治窯跡群産のものである。第1号住居跡の坏3点（第9図1～3）の法量比分布は、消費地分類の2類と3類である¹⁾。新治窯跡群編年²⁾の8世紀第4四半期に位置付けられる東城寺桑木段階が消費地分類の2類で構成され、9世紀第2四半期に位置付けられる東城寺寄居前窯跡B単位群が消費地分類の3・4類に該当する。そのため消費地分類の2類と3類で構成される第1号住居跡の坏は、9世紀第1四半期の年代が考えられる³⁾。

第2号住居跡の蓋（第12図6）は、口縁屈曲部内側にわずかな隆帯を作り出してかえりとしており、断面に粘土紐を貼り付けた痕跡が認められない。つまみは紐高0.7cm、紐径3.8cmと偏平で径も大きく、新治窯跡群編年のX2段階に該当するもので、8世紀第2四半期に位置付けられる。蓋（第12図5）は短頸壺に組み合うもので、木葉下窯跡群TE5段階のa形式と同じ形態と考えられる⁴⁾。TE5段階の年代は8世紀第2四半期とされており、二種類の蓋の年代は一致する。

第1・2号住居跡出土の遺物の年代は、以上の須恵器の時期から考えると第1号住居跡が9世紀第1四半期、第2号住居跡が8世紀第2四半期に位置付けられる。

2 管状土錐について

(1) 土錐の類型化について

土錐は、「漁具の網の錐⁵⁾」と考えられている。考古資料の土錐と昭和年間に使用していた民俗資料の土錐は、形態が変わらない。土錐はそのような民俗資料との比較から、その用途を漁網錐とされている。第1・2号住居跡出土の8世紀第2四半期と9世紀第1四半期の土錐も、かすみがうら市郷土資料館が所蔵している民俗資料⁶⁾の土錐と同様な形態である。

考古資料の土錐は、その形態から「管状土錐」と「球状土錐」に大きく分けられる。管状土錐については、関雅之氏が太さと長さの比および重量をもとに、新潟県の資料を「細型」「大型」「中間型」の3種に分類している⁷⁾。佐々木義則氏は、茨城県内出土の奈良・平安時代における管状土錐と球状土錐について、長さ（大きさ）と重量の分布域を調べ、「大形管状土錐」「管状I A類」「管状I B類」「管状I C類」「管状II類」「管状III類」「細形管状I類」「細形管状II類」「球状I類」「球状II類」「球状III類」の11類型に分類している⁸⁾。

第1・2号住居跡出土の土錐の完形品について、佐々木氏の方法で長さ（大きさ）と重量の分布域に当てはめると、第21図のようになる。第1号住居跡出土の5点（写真 第9図12・13・17・23・24）は、長さ5.8～8.0cm、重量13.0～22.6gの範囲に含まれ、佐々木氏の11類型の中のどれにも属さない。

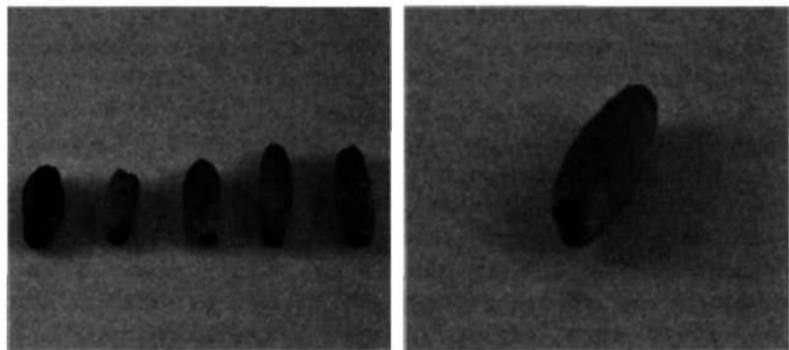
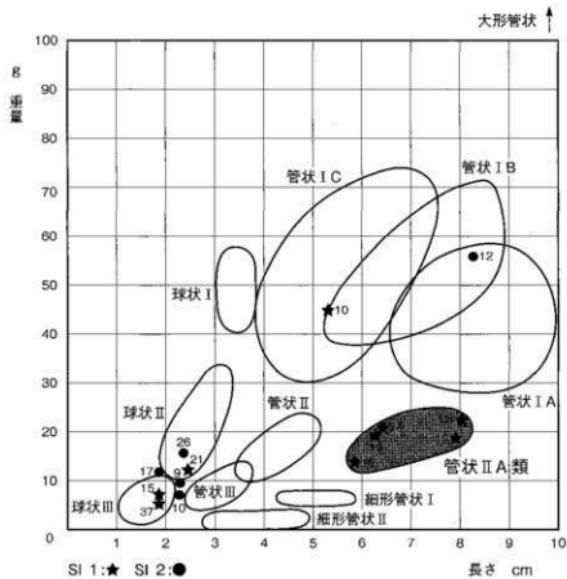


写真 第1号住居跡出土の管状II A類（左から図番号 24・12・13・17・23 写真右は図番号 17）



第21図 茨城県内の奈良・平安時代の土錘の分類（佐々木 2013 をもとに加除作成）

この5点を基準資料として、佐々木氏の類型に追加して新たに「管状II A類」を設定する。第1号住居跡出土のそのほかの土錘は、「管状I類」（第9図10）、「球状II類」（第9図21）、「球状III類」（第9図15・37）、第2号住居跡出土のものは、「管状I類」（第12図12）、「球状II類」（第12図17・26）、「球状III類」（第12図9・10）に属する。

(2) 管状II A類の土錐を使用した漁法について

管状II A類は、小形で軽量な土錐である。そのような小形軽量のものは管状II類も含めて、民俗例との比較から刺網に使用されたものと考えられる¹³⁾。刺網は浮子の浮力と錐の重量のバランスにより網を水中に自立させ、遊泳する魚を網目に絡ませて逃げられない状態にして獲る漁法である。浮力の高い浮子と重量の大きい錐の組み合わせは、網に強い張力が生じてしまい、網に触れた魚が違和感を感じて逃げてしまう。刺網で重要なことは、魚に違和感を与えない程度に網を自立させることであり、網が自立する範囲で、浮子と錐は軽いほうがよい¹⁴⁾。また、網自体を水中で魚に気付かれないようにするために、より細い繊維で作られることから¹⁵⁾、浮子は軽く、錐も管状II・II A類のような軽いものが適する。

同じ刺網用の錐と考えられる管状II類と管状II A類の長さ（大きさ）と重量の分布域の違いは、網の規模や網目幅の違い¹⁶⁾を反映しており、それは漁の対象魚の違いによって作り分けられたものと考えられる。民俗例でも、漁の対象とする魚を熟知した漁師の注文に応じて、土錐の長さと重量を決定して製作している¹⁷⁾。

(3) 奈良・平安時代における刺網漁で捕れる魚について

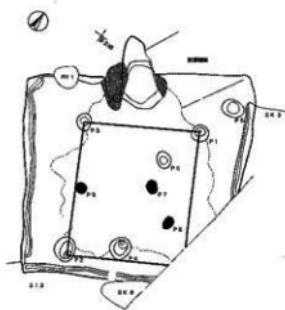
遺跡周辺で刺網が行える漁場として、霞ヶ浦は『常陸國風土記¹⁸⁾』で「流海」と表記され、塩作りの様子が記載されているように、内海で汽水域が広がっていたものと考えられる¹⁹⁾。その環境で生息する魚については、発掘調査で出土した魚骨を参考とする。縄文時代後晩期の土浦市小松貝塚²⁰⁾からは、トラフグ、マダイ、スズキ、ヒラメ、ボラ、ウナギ、コイの骨が出土している。この中で汽水域に生息して刺網で獲れる魚はスズキ、ボラで、コイは純淡水魚であるが、塩分濃度が低ければ汽水域でも生息でき刺網で獲れる²¹⁾。『常陸國風土記』の記載からも、霞ヶ浦およびその周辺でコイが捕れていたことが分かる²²⁾。

第1号住居跡から出土した管状II A類は刺網用の錐であり、種やかな内海の汽水域でスズキ、ボラ、そのほかコイを獲っていたことを想定する。

第1・2号住居跡から出土した完形の土錐は、孔周辺に磨滅した痕跡が認められないことから、未使用のまま廃棄されともと考えられる（写真）。漁に使用している網の管理場所は集落内ではなく、より漁場に近い場所が想定することができ²³⁾、集落で管理しているのは、錐が壊れた際の予備である未使用のもので、それが住居廃絶後に廃棄されたものと推測される。

3 第1号住居跡のピットと第1・2号住居跡の主軸方向について

(1) 第1号住居跡のピットについて



第22図 第1号住居跡のピット配置
(縮尺 1:100)

第1号住居跡は9か所のピットがあり、主柱穴（P1～P3）、出入り口設施に伴うピット（P4）、性格不明のピット（P5・P6）である。これらのピットは円形もしくは梢円形の柱掘り方が明確である。

P7～P9はそれらのピットと違って柱掘り方が明確でなく、深さ2.7～6cmのくぼみであり、その底面は硬化している。くぼみの底面の規模は、長径12cm、短径6～10cmであり、筑西市栗島遺跡第3号住居跡出土の柱材²⁴⁾の径と近い数値である。このことからP7～P9は主柱穴を補助して上屋を支えていた柱が、上屋の重さによって沈下した際についた柱の圧痕と考えられる。主柱穴以外の上屋を支える柱の存在を示す、微細



第23図 古代東海道駅路想定図（上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2013に加筆作成）

な痕跡と考えられる。

(2) 第1・2号住居跡の主軸方向について

第1号住居跡と第2号住居跡の主軸方向は、それぞれN - 68° - W、N - 53° - Wである。奈良時代と平安時代の時期が異なる2軒の住居跡の主軸方向は、多少異なっているが西に大きく振れています。時期が明確でないが、平安時代の可能性がある第5号住居跡も主軸方向がN - 65° - Wであり、西に大きく振れている。これらの3軒は構築する際に、共通の基準もしくは目安のようなものが存在した可能性がある。

遺跡内を古代東海道駅路が北西 - 南東方向に通るように想定されている²⁰。この駅路の方向と3軒の住居跡の主軸方向は、西に大きく振れています。駅路の走行方向が奈良時代と平安時代における住居構築の際の、基準もしくは目安になっている可能性がある。官道と宮衙の関係ほど厳密な規準ではないが、官道沿いに位置する集落においても、官道を意識した建物配置をすることが推測される。

下高津小学校遺跡の今回の調査において、古墳時代後期から平安時代までの集落であることが明らかとなつた。そのなかで第1・2号住居跡を中心に考察し、第1号住居跡から出土した管状土錠を基準資料として、新たに管状II A類という類型を設定した。管状II A類は刺網の錠と考えられ、小松貝塚から発掘された魚骨と『常陸國風土記』から推測できる霞ヶ浦の環境から、スズキ・ボラ・コイを漁の対象魚として考えてみた。

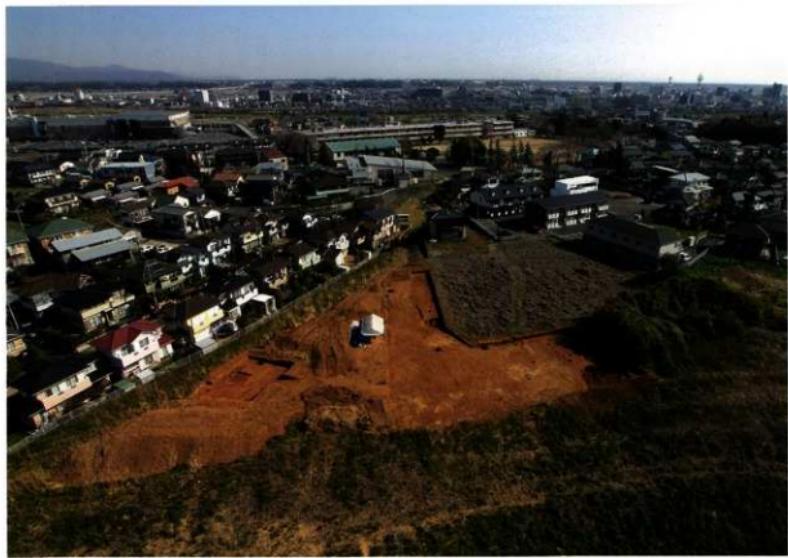
下高津小学校遺跡の西側にも土錠を多量に出土した、寄居遺跡とうぐいす平遺跡²⁰が位置している。これら3か所の集落は、水陸両方の要所に立地しており、物資が集積するこの周辺に市場が想定されている²¹。刺網漁から専業的な漁業集団²²が想定され、『常陸國風土記』に記されたコイやフナなどの動物性食料が特産品的食料で、交易品的性格をもつならば²³、刺網漁に使用する土錠を多量に出土する古代の集落が、交通の要所であり市場が想定されるこの地に集中していることが指摘できる。

今回の調査は集落のごく一部であり、調査区の東側にさらに広がっている。今後の調査成果によって、このまとめの内容について検討を行いたい。

註

- 1) 赤井博之 佐々木義則「新治麻跡群須恵器坏A I の変化－消費地の様相－」『婆良岐考古』第18号 婆良岐考古同人会 1996年5月
- 2) 赤井博之「古代常陸國新治麻跡群の基礎的研究(1)～奈良・平安時代の須恵器編年を中心に～」『婆良岐考古』第18号 婆良岐考古同人会 1996年5月
- 3) 佐々木義則氏から新治麻跡群編年の9世紀第1四半期に位置付けられている小高村内段階は、麻跡探査資料数が少ないとから法量比分布の特徴が把握できないことを御教示いただいた。 佐々木義則「小美玉市羽黒遺跡から出土した奈良・平安時代土器の紹介」『小美玉市史料館報』第3号 小美玉市史料館 2009年3月
- 4) 佐々木義則「木葉下麻跡群の須恵器生産－奈良時代前半を中心に－」『婆良岐考古』第19号 婆良岐考古同人会 1997年5月
- 5) 斎藤忠「土錠」『日本考古学用語辞典<軽版版>』 学生社 1996年9月
- 6) 霞ヶ浦町郷土資料館「霞ヶ浦町郷土資料館所蔵資料類一覧表・道具類」 霞ヶ浦町郷土資料館 2003年3月
- 7) 関雅之「古代細型管状土錠類」『越後考古学』第3号 北越考古学研究会 1990年4月
- 8) 佐々木義則「展示資料紹介 奈良・平安時代の漁網錠－ひたちなか市出土の類型について－」『ひたちなか埋文だより』第38号 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター 2013年3月
- 9) 7) 8) 文獻のはか以下の文献
9)a 内水面漁撈の諸相 第2章 内水面漁業における土製漁網錠『古代日本海の漁撈民』 同成社 2009年2月
9)b 大沼秀芳「古代近江における漁業漁民の動向－松原内湖遺跡出土の刺網系漁網錠の分析から－」『紀要』第25号 財団法人滋賀県文化財保護協会 2012年3月
- 10) 9) b 文獻
- 11) 9) a 文獻
- 12) 7) 8) 文獻
- 13) 9) a 文獻
- 14) 秋本吉郎「常陸國風土記 全訳注」講談社学術文庫 1518 講談社 2004年12月
- 15) 霞ヶ浦が湖の中央部まで淡水化するのは、湖底の土壤の分析から室町時代の後半(1500年代ころ)という。茨城県立歴史館『特別展 霞ヶ浦と太平洋のめぐみ～塩づくり～』 茨城県立歴史館 2012年10月
- 16) 福田孔子 川島尚宗 佐藤幸雄 吉永アシ子 阿部きよ子 鮎田純明 望月明華 関口満 黒澤春彦「小松貝塚」 土浦市教育委員会 2012年3月
- 17) ミュージアムパーク茨城県立自然博物館の増子勝男氏に、漁の対象魚を汽水域の魚まで考える必要があることを御教示いただいた。アクアワールド茨城県大洗水族館の沼田慎之氏には、小松貝塚出土の魚骨の中で汽水域に生息して刺網で捕れる魚とコイの生息場所について御教示いただいた。スズキとボラは現在でも霞ヶ浦に生息しているという。
- 18) 佐々木義則「古代常陸の『婆良岐考古』第25号 婆良岐考古同人会 2003年5月『常陸國風土記』の香取郡と行方郡には、コイのほかナマコも記載されているので、霞ヶ浦で獲っていたことが分かる。ナマコも刺網で獲れる魚である。スズキとボラは『常陸國風土記』に記載されていないが、9) a 文獻によれば『出雲國風土記』には、汽水域である中海・宍道湖にスズキとボラが記載されている。霞ヶ浦でも古代にスズキとボラを獲っていたことは充分考えられる。
- 19) 川村勝「3 陣屋敷遺跡出土の管状土錠と問題点(予察)」「『陣屋敷遺跡』 豊浦町教育委員会 陸平調査会 1992年12月 住居跡に予備である未使用の管状土錠を管理していた可能性については、佐々木義則氏に御教示いただいた。」
- 20) 奥沢哲也「栗島尚助」「茨城県教育財團文化財調査報告」第26号 財団法人茨城県教育財團 2007年3月
- 21) 上高津貝塚ふるさと歴史の広場「上高津貝塚ふるさと歴史の広場 第12回特別展 古代のみち－常陸を通る東海道駅路－」 上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2013年3月
- 22) 土生治朗「寄居遺跡 うぐいす平遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告」第84集 財団法人茨城県教育財團 1994年3月 佐々木義則氏は8) 文獻で、うぐいす平遺跡第8号住居跡(8世紀後半)の管状土錠を基準資料として、『管状II A類』を設定しており、免網用の錠と推測している。近くに位置している衣笠同士で調査を行っているが、流法が違う可能性がある。
- 23) 古津宿 第V章 論考編 一般集落における灰陶焼器の保有形態』第9回特別展と白への憧憬－施釉焼器がもたらされた場所』上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2004年 上高津貝塚ふるさと歴史の広場の『第12回特別展 古代のみち－常陸を通る東海道駅路－』においても、小字の「町ノ市」から市があつたことを想像している。
- 24) 9) a 文獻
- 25) 18) 文獻

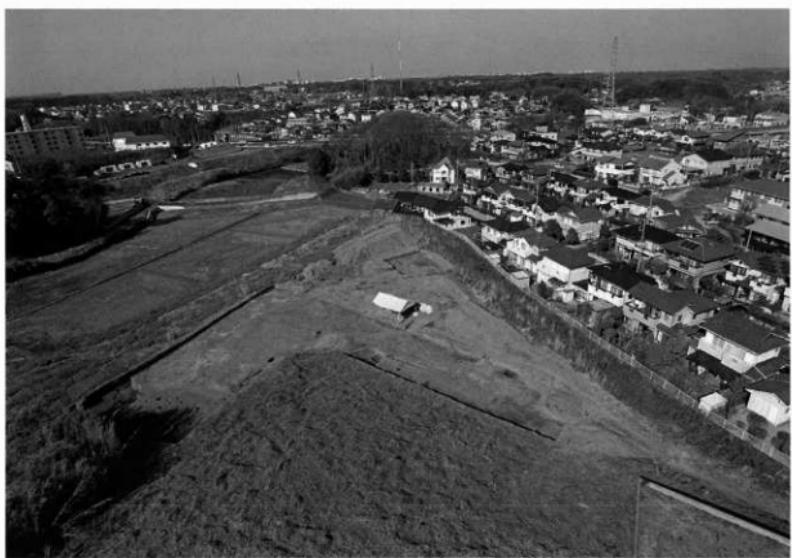
写 真 図 版



調査区遠景(南西から)



調査区遠景(北東から)



調査区遠景(東から)

PL 2



調査区遠景(真上から)



第1～3号住居跡完堀状況



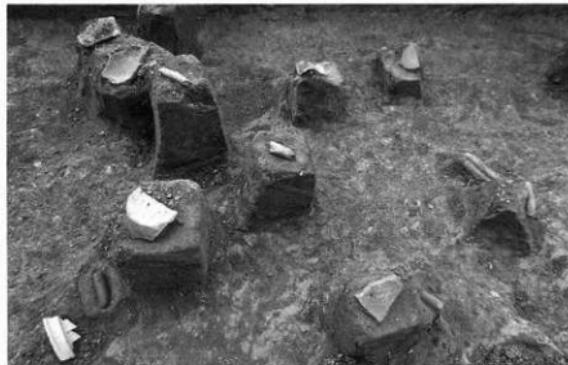
第 1 号 住 居 跡
完 堆 状 況



第 1 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況 (1)



第 1 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況 (2)



第 1 号 住 居 跡
遺 物 出 土 狀 況 (3)



第 1 号 住 居 跡
遺 物 出 土 狀 況 (4)



第 1 号 住 居 跡
遺 物 出 土 狀 況 (5)



第 1 号 住 居 跡
遺 遺 物 出 土 状 況



第 1 号 住 居 跡
甕 抽 部 断 ち 剥 り 状 況



第 2 号 住 居 跡
完 塗 状 況



第2号住居跡
遺物出土状況



第3号住居跡
遺物出土状況(1)



第3号住居跡
遺物出土状況(2)



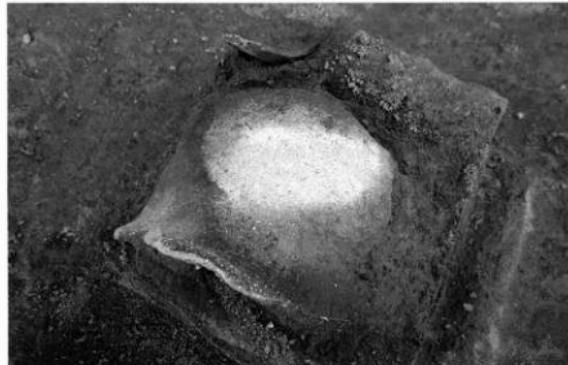
第 3 号 住 居 蹤
遺 物 出 土 状 況 (3)



第 3 号 住 居 蹤
遺 物 出 土 状 況 (4)



第 4 号 住 居 蹤
完 塚 状 況



第4号住居跡
遺物出土状況



第5号住居跡
完堀状況



第5号住居跡
竪完堀状況



第 6 号 住 居 跡
完 塚 状 況



第 6 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

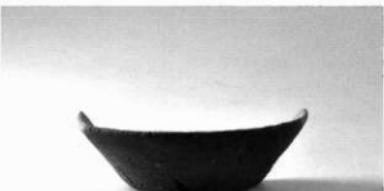


第 7 号 住 居 跡
確 認 状 況

PL10



SI 1 - 1



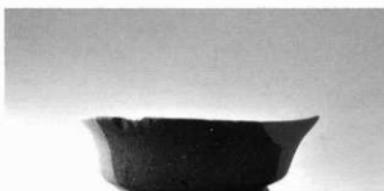
SI 1 - 2



SI 1 - 3



SI 2 - 1



SI 2 - 4



SI 3 - 1



SI 3 - 4



SI 3 - 6

抄 錄

茨城県土浦市

下高津小学校遺跡

— 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

印刷日 平成 25 年 6 月 25 日

発行日 平成 25 年 6 月 28 日

編 集 有限会社毛野考古学研究所 茨城支所
〒 303-0044 茨城県常総市菅生町 2042-1
TEL 0297-27-0722

発 行 土浦市教育委員会
〒 300-1192 茨城県土浦市藤沢 975
TEL 029-826-1111(代表)

印 刷 山三印刷株式会社
〒 311-4153 茨城県水戸市河和田町 4433-33
TEL 029-252-8481